

## 白居易の「贈物詩」について

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2009-02-06<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 澤崎, 久和<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10098/1902">http://hdl.handle.net/10098/1902</a>                    |

# 白居易の「贈物詩」について

澤 崎 久 和

## 一 はじめに

白居易の詩には、友人や親族と物品を贈答したさいの作が少なからず含まれる。合山究氏によれば、贈答品に関する詩は盛唐以前にはほとんど見られず、杜甫・李白あたりからわずかに出現し、中晩唐にかけて増加傾向をみせるが、これが急増するのは宋代に入ってからである。宋代においては、物品贈答にもなつて詩をやり取りする「作詩送物」の風習が文人間の交遊に欠くべからざるものとして広く流行する<sup>①</sup>。筆者はこれをうけて「白居易の詩と贈答品」<sup>②</sup>と題する小文を著し、白居易の詩にうたわれる贈答品とその詩について若干の紹介と考察を行ったが、紙幅の関係で取り上げることのできた作品はごく一部にすぎなかった。本稿ではこれを網羅的に取り上げて基礎的整理を行い、(一) 白居易の贈物詩、(二) 贈答品、(三) 附詩・謝詩・唱和詩(用語については次節に述べる)について検討する。

## 二 白居易の贈物詩

あらかじめ、物品贈答に関する詩の名称について述べておく。冒頭に挙げた合山氏の論文では、贈答された物品を、受け取る場合の「受贈」、贈る場合の「送饋」に分類し、これにその他として「乞求」(人に物を乞う詩)を挙げられるが、詩そのものについては「贈答品に関する詩」と称して特定の名称を与えてはおられない。筆者の小文も、これに特定の名称を与えてはいない。これに対して、坂井多穂子氏は梅堯臣の詩について考察され、物品の贈答授受をよむ詩を「贈受品詩」と名づけ、人に物品を贈るさいの詩を「贈品詩」、受け取ったさいの詩を「受品詩」と称された<sup>③</sup>。高兵兵氏は菅原道真の漢詩の特色を考察されるにあたり白居易までの唐詩をも調査され、物品の贈答を介して生じる詩を「贈物詩」と名づけ、これから物を贈られたさいの答謝の詩「受物酬答」と、人に物を贈るさいに添える詩「贈物附詩」とに分類された<sup>④</sup>。中国では張浩遜氏が、物品を受け取った者が謝意を表す詩を「酬謝詩」と称された<sup>⑤</sup>。ただし、張氏には物品を贈るさいに添える詩についてはとくに言及が

ない。本稿では主に高氏にならない、物品贈答に関わる詩を「贈物詩」と総称し、人に物を贈るさいに添える詩を「贈物附詩」(「附詩」と略す)、物を贈られたさいの答謝の詩を「受物謝詩」(「謝詩」と略す)と称することとする。さらに、謝詩がうたわれた後に当人同士ないしその友人によって詩がやりとりされた場合は、これを単に「唱和詩」と称する。謝詩は、これに先立つ附詩が存在する場合は附詩に対する唱和詩でもあるが、実際には附詩が存在せず、謝詩が最初によまれることが多い。そこで、本稿では附詩の有無に関わらず、受物のさいの答謝の詩を謝詩と呼ぶこととする。

さて、合山氏は唐詩に出現する贈答品に関わる詩の数を主要詩人について数えられ、白居易については二〇首とされた。これに対して筆者は、物品贈答に関する白居易の詩は「数え方にもよるけれども三十数首にのぼる」(注(2)拙文)と記した。その後、高氏は「贈物附詩」が八首、「受物酬答」が九首、計一七首と数えられた。三者ともに当該詩の題名を列挙しているわけではないので、どの詩を贈物詩とみるかについてはなお検討の余地が残る。本稿において贈物詩と定めたのは、左の表Iに示した附詩一四首、謝詩二〇首、計三四首である。これ以外に、詩の内容の一部から物品贈答の事実を知り得る詩一二首を得た(表II)。個々の詩の詩題と贈答の内容については後掲【資料篇】において一括して示し、左にはこれをもとに贈物詩の贈り手・受け手・任地・贈答品等を一覧表としたものを掲げる。なお、本稿における白居易の詩の引用は謝思煒撰『白居易詩集校注』(中華書局、二〇〇六年。以下、『校注』と略す)に

より、散文については朱金城撰『白居易集箋校』(上海古籍出版社、一九八八年。以下、『箋校』と略す)による。

【表I】

〈 〉内の数字は【資料篇】のそれに対応する。「年齢」は作詩時の年齢。「四一」のように数字のあとに「線」を付したものは、その年から翌年にかけての作。「任地」は退居の地を含む。贈答品の名称は詩題ないし詩本文から原文のまま抜き出したもの。四桁の数字は花房英樹氏による白詩の作品番号(注(4)参照)。

| 年齢     | 贈り手(任地) ↓ 受け手(任地)  | 贈答品        | 番号   | 詩型   |
|--------|--------------------|------------|------|------|
| 〈01〉三九 | 庾敬休(宣州?) ↓ 白居易(長安) | 紫霞綺        | 0736 | 七律   |
| 〈02〉三九 | 白居易(長安) ↓ 元 稹(江陵)  | 大通中散・碧腴垂雲膏 | 0730 | 七律   |
| 〈03〉三九 | 蕭員外(蜀) ↓ 白居易(長安)   | 新蜀茶        | 0774 | 七絶   |
| 〈04〉四一 | 白居易(下邳) ↓ 少年(下邳)   | 鏡          | 0466 | 五古   |
| 〈05〉四三 | 李 建(長安) ↓ 白居易(下邳)  | 馬          | 0798 | 七絶   |
| 〈06〉四四 | 白居易(長安) ↓ 元 稹(通州)  | 生衣(穀衫・紗袴)  | 0847 | 七絶   |
| 〈07〉四五 | 白居易(江州) ↓ 元 稹(通州)  | 蘄州簾        | 0939 | 五排   |
| 〈08〉四六 | 李 宣(忠州) ↓ 白居易(江州)  | 新蜀茶        | 0994 | 七律   |
| 〈09〉四六 | 元宗簡(長安) ↓ 白居易(江州)  | 金石凌        | 1041 | 七言六句 |
| 〈10〉四七 | 元 稹(通州) ↓ 白居易(江州)  | 緑糸布・白輕袴    |      |      |

|        |                  |         |           |    |  |                 |      |    |    |
|--------|------------------|---------|-----------|----|--|-----------------|------|----|----|
| <11>四七 | 裴 堪(江州)↓白居易(江州)  | 緋袍・魚袋   | 1011      | 七律 | <31>六九 崔龜從(宣州)↓白居易(洛陽)   | 銀觥・霞綺           | 3447 | 七律 |    |
| <12>四八 | 白居易(忠州)↓康 叟(忠州)  | 寒衣      | 1112      | 七絶 | <32>六九 楊嗣復(長安)↓白居易(洛陽)   | 茶・藥・衣裳          | 3465 | 七律 |    |
| <13>四八 | 白居易(忠州)↓楊焯厚(万州)  | 胡餅      | 1124      | 七絶 | <33>七〇 南 卓(洛陽)↓白居易(洛陽)   | 青苔石             | 3554 | 七絶 |    |
| <14>四八 | 白居易(忠州)↓元宗簡(長安)  | 木蓮花図    | 1127      | 七絶 | [表II]  |                 |      |    |    |
| <15>四八 | 白居易(忠州)↓楊焯厚(万州)  | 荔枝      | 1131      | 五排 | ここに取上げた詩は、物品の贈答が回想の中で語られる作が半ばを占める。この場合、贈答が行われた時と作詩の時とは異なることとなる。左に示した白居易の年齢と任地はいずれも作詩時のものである。 |                 |      |    |    |
| <16>四八 | 白居易(忠州)↓楊焯厚(万州)  | 荔枝      | 1133      | 七律 | 年齢   | 贈り手(任地)↓受け手(任地) | 贈答品  | 番号 | 詩型 |
| <17>五一 | 白居易(杭州途中)↓阿亀(長安) | 銀匙      | 1316      | 五律 | <34>三九 元 稹(江陵)↓白居易(長安)   | 銀杯              | 0733 | 七絶 |    |
| <18>五一 | 錢 徽(湖州)↓白居易(杭州)  | 簪下酒     | 1341      | 七律 | <35>四一〜美人 ↓白居易(下邳)   | 鏡               | 0475 | 五古 |    |
|        | 李 諒(蘇州)↓白居易(杭州)  | 五醖酒     | 1341      | 七律 | <36>四三 元 稹(江陵)↓白居易(下邳)   | 衣食資             | 0465 | 五古 |    |
| <19>五一 | 蕭 悦(杭州)↓白居易(杭州)  | 竹画      | 0594      | 七古 | <37>四三 崔群・錢徽(長安)↓白居易(下邳)   | 帛・糧・藥・書         | 0807 | 五排 |    |
| <20>五二 | 白居易(杭州)↓張 籍(長安)  | 郡樓登望図   | 1378      | 七律 | <38>四六 嬋娟子 ↓白居易(江州)  | 履               | 0511 | 五古 |    |
| <21>五四 | 崔玄亮(湖州)↓白居易(蘇州)  | 紅石琴薦    | 2199      | 五律 | <39>四八 楊焯厚(万州)↓白居易(忠州)   | 嘉慶李             | 1136 | 七絶 |    |
| <22>五七 | 白居易(長安)↓裴 度(長安)  | 鶴       | 2626      | 七律 | <40>五一 李 建 ↓白居易(杭州)〜烏紗帽  |                 | 0345 | 五律 |    |
| <23>六〇 | 白居易(洛陽)↓裴 度(襄州)  | 銀榼      | 2780・2781 | 七絶 | <41>五一 白居易(杭州)↓蕭悦・殷堯藩(杭州)  | 裘               | 0606 | 七古 |    |
| <24>六二 | 劉禹錫(蘇州)↓白居易(洛陽)  | 鶴       | 3108      | 五律 | <42>五三 崔玄亮(湖州)↓白居易(杭州)   | 簪下酒             | 1402 | 七律 |    |
| <25>六三 | 楊虞卿(常州)↓白居易(洛陽)  | 茶       | 3128      | 七律 | <43>六四 山 客(洛陽)↓白居易(洛陽)   | 磐石              | 2947 | 銘  |    |
| <26>六三 | 劉禹錫(蘇州)↓白居易(洛陽)  | 糯米      | 3223      | 七律 | <44>六四 韋 長(洛陽)↓白居易(洛陽)   | 春服              | 3217 | 七律 |    |
|        | 李 紳(越州)↓白居易(洛陽)  | 舞衫      | 3223      |    |  |                 |      |    |    |
| <27>六五 | 牛僧孺(揚州)↓白居易(洛陽)  | 箏       | 3286      | 五律 |  |                 |      |    |    |
| <28>六七 | 裴 度(洛陽)↓白居易(洛陽)  | 馬       | 3346      | 七絶 |  |                 |      |    |    |
| <29>六七 | 楊汝士(梓州)↓白居易(洛陽)  | 秋衣・(春茶) | 3374      | 七絶 |  |                 |      |    |    |
| <30>六八 | 李 紳(汴州)↓白居易(洛陽)  | 白馬      | 3399      | 七律 |  |                 |      |    |    |

(45)六五 牛僧孺(揚州)↓白居易(洛陽) 箏・酒錢・霜紉・楚體

3289 五排

### (1) 贈物と受物

表Ⅰの贈物詩を年代順に見るならば、長安において左拾遺・翰林学士であった三九歳以前には贈物詩は残されていない。表Ⅱにおいても物品の贈答が確認できるのは三九歳の作からである。贈物詩は元稹や庾敬休といった友人が遠地に去つてのちに出現する。四十代以降は、五十代後半が少ないのを除いて、ほぼ毎年のように作られている。物品の贈答が折に触れて行われていたとともに、白居易はそれを主題とする詩を作り続けていたと言える。

これを表Ⅰに限って贈物と受物という観点から見ると、五十代の終わりに洛陽に退居する以前は両者の割合はほぼ等しい(贈物一二、受物一〇)のに対して、洛陽退居以降は受物がほとんどを占める(贈物一、受物一〇)。白居易は洛陽に退居してからは、もっぱら遠方の知人から物品を受け取る立場であった。全体として、白居易の贈物詩のうち附詩は一四首、謝詩は二〇首。贈物詩に対する附詩の割合は四割に達する。この割合は唐詩人の中ではきわめて高い(後述)。

### (2) 詩型と詩題

白居易の贈物詩においてもっとも多く用いられる詩型は七律一首であり、七絶一首がこれにつぐ。その他には五律四首、五言排

律二首、五言古詩・七言古詩・七言六句各一首が用いられる。ことに謝詩の場合、二〇首の半ば(一〇首)が七律であることが目に付く。このように、贈物詩に近体詩が多く用いられるという傾向は、かならずしも白居易に限ったことではない。たとえば、劉禹錫の贈物詩一三首に使用される詩型の内訳は七絶五首、七律四首、五律三首、五古一首であり、元稹九首の内訳は七律五首、七絶三首、五排一首である。劉禹錫・元稹ともに律詩・絶句が大半を占めることがわかる。<sup>8)</sup> 晩唐の齊己(八六四〜九四三?)の作には四十首余りの贈物詩が含まれるが、その大半は七律と五律であり、これに七絶が数首加わるのみである。唐代においては、贈物詩の多くは律詩・絶句を中心とした近体詩であり、白居易の詩もまたその傾向の中にあつたと言えよう。<sup>9)</sup> 律詩・絶句といった近体の短詩形は、人に物品を贈る添え状の役割、あるいは物品の受贈を謝する礼状の役割を果たすものとしてふさわしかったと思われる。

贈物詩の詩題は、宋詩においては「謝寄」「謝惠」「謝送」のように、「謝+贈り手+寄・惠・送+物品」という形式が一つの定型的表現として定着している。たとえば、蘇軾に「謝王澤州寄長松、兼簡張天覺二首」(『蘇軾詩集』卷二九、一五四四頁、中華書局排印)、「謝蘇自之惠酒」(卷五、二二六頁)、「謝關景仁送紅梅栽二首」(卷三三、一七三九頁)などとあるのがその例である。もとより宋詩の贈物詩の詩題は多様であるが、一方で多くの詩にこのような定型的表現が認められることは、贈物詩と称し得る一類の作品が確かに成立していたことを意味しよう。この点、唐詩ではどうで

あろうか。唐詩においては、杜甫に先例<sup>10)</sup>があるものの、盛唐ころまではこの表現はなお稀であり、中唐にいたって散見するようになる。劉禹錫に「謝柳子厚寄疊石硯」(瞿蛻園著『劉禹錫集箋証』外集卷八、一四七一頁。上海古籍出版社、一九八九年。以下、『箋証』と略す)、張籍に「謝裴司空寄馬」(中華書局排印『全唐詩』卷三八五、四三三二頁)等とあり、白居易に(8)「謝李六郎中寄新蜀茶」、(29)「謝楊東川寄衣服」がある。その後、牟融・李涉・姚合・許渾・薛能・李咸用・羅鄴・徐夔・崔道融・盧延讓・謝邈・貫休等に「謝」と題する贈物詩があり、晩唐の齊己に至っては謝詩三九首の詩題のすべてが「謝」に始まっている。しかも齊己の場合、その大半は「謝人惠竹蠅拂」(全唐詩卷八四〇、九四八五頁)、「謝中上人寄茶」(同九四八七頁)などと、「謝惠」「謝寄」という宋詩のそれと同様の表現をとっている。詩におけるこの種の定型的表現は杜甫を先駆とし、白居易とその周辺の中唐詩人によって徐々に広まり、晩唐の齊己において一種の定型として確立し、宋代に継承されたと言ってよいであろう。

散文においては、道坂氏の論考によって整理された「謝啓一覽」を見るに、南斉の王融に「謝武陵王賜弓啓」(出典は『芸文類聚』卷六〇など)とあるように、六朝の謝啓には「謝賜」「謝賜」等の表現が数多く用いられている。おそらく、詩における定型的表現はこれに先立つ散文にならうものであろうが、これについては唐代の散文を調査した上で別に考察する必要がある。白居易自身、三十年代後半、翰林学士の任にあったころ、「謝恩賜衣服状」(1974)、「謝恩賜茶果

等状」(1982)、「社日謝賜酒餅状」(1984)など、下賜品に対する幾通かの札状を表している。

### (3) 贈答の相手と發送地・受取り地

物品贈答の相手二五名を贈物・受物に分けて掲げる。「贈」は白居易が物品を贈った相手、「受」は白居易が贈られた相手の数字は贈答の回数(一回の場合は記さない)。詩人名の配列は表1の順。

贈・元稹(三)、少年、康叟、楊婦厚(三)、元宗簡、阿龜、張籍、

#### 裴度(二)

受・庾敬休、蕭員外、李建、李宣、元宗簡、元稹、裴堪、錢徽、

李諒、蕭悅、崔玄亮、劉禹錫(二)、楊虞卿、李紳(二)、牛僧

孺、裴度、楊汝士、崔龜從、楊嗣復、南卓

右のうち、少年・康叟・阿龜と白居易との間では詩の唱和が行われた否か疑問であるが、(8)の阿龜については実際はその父親であり白居易の弟である行簡に贈られたと考えられるから、行簡からの謝詩があったであろう。いまこの三名を別とすれば、他の二二名は元稹・劉禹錫を始めとしてその多くが白居易と深い交遊をもった人物であり、蕭員外・李宣以外は贈物詩以外にも白居易と多数の詩を贈答している。なかでも、元稹・元宗簡・裴度の三人は贈物・受物双方の相手となっている。白居易と交遊をもった主要な人

物について考察した論文に、朱金城氏による「白居易交遊考」(『白居易研究』所収、陝西人民出版社、一九八七年)がある。これには元稹等二六名の人物(金鑾子と羅子は除く)が取り上げられるが、

この中に先にあげた白居易の贈物詩の相手である二五名のうち、元稹・楊帰厚・元宗簡・張籍・裴度・庾敬休・李建・錢徽・崔玄亮・楊虞卿・李紳・牛僧孺・楊汝士の一三名が含まれる。朱氏には「白居易交遊考」に続いて「白居易交遊続考」「白居易交遊三考」(ともに『白居易研究』所収)があるが、右の一三名以外にも「続考」には崔龜從が、「三考」には裴堪・劉禹錫・楊嗣復が収められる。<sup>13)</sup>

贈物詩に関わった人物の大半は、物品贈答以外においても白居易にとつて交遊の深かった人物と言えよう。逆に言えば、交遊が深かつたからこそ物品の贈答も行われたのである。

次に贈答が行われたさいの白居易と相手方の居所を列挙する。贈物と受物の区別はしない。括弧内は作品数。配列は表Iの順。

白居易・長安(五)、下邳(二)、江州(五)、忠州(五)、杭州途

中、杭州(四)、蘇州、洛陽(二三)

相手・宣州(二)、江陵、蜀、下邳、長安(七)、通州(二)、

忠州(二)、江州、万州(三)、湖州(二)、蘇州(三)、

杭州、襄州、常州、越州、揚州、洛陽(二)、梓州、下州

右のように、白居易の贈物詩は白居易が生涯に滞在したほとんどの地で作られている。表IIに取り上げた詩について見ても、表I同様に長安・下邳・江州・忠州・杭州・洛陽を挙げることができる。

相手方の任地も多岐にわたるが、長江流域と蘇杭周辺及び巴蜀の諸州が目につく。都長安と東都洛陽を別として、その多くは遠方の地である。

物品の發送地と受取り地についてみるならば、長安・洛陽を中心とする黃河流域と、蘇杭・楚・蜀を中心とする長江流域との間で南北に贈答する例が多い。具体的に記せば、長安は杭州・江州・江陵・忠州・通州・蜀との間で、洛陽は越州・蘇州・常州・揚州・宣州・梓州との間で贈答がなされている。むろん、(07)〈10〉のように江州の白居易と通州の元稹との間で東西に贈答された例や、(13)〈14〉〈16〉のようにともに長江中流域に位置する忠州の白居易と万州の楊帰厚との間で贈答された例もあるから一概には言えないが、いずれにしても贈答は同じ土地で行われるよりも遠隔地間で行われることの方が多<sup>15)</sup>い。表Iにあげた三四首中、同じ土地での贈答は七首のみである<sup>16)</sup>。遠隔地間であるがために、贈答に選ばれる物品はしばしばその土地の特産品となる(後述)。

なお、詩文の贈答の場合、一般に人に託して送り届けるのが「寄」、直接手渡すのが「贈」とされる<sup>17)</sup>。白居易の贈物詩においても、同一地で行われた七首のうち(04)〈11〉〈12〉〈22〉〈28〉〈33〉の六首には「贈」の字が用いられるが(いま一例の(19)は詩題の引に「惠然見投」とある)、これに対して遠隔地間での贈答には以下の二例を除いていずれも「寄」字が使用される。二例とは、(01)「庾順之以紫霞綺遠贈、以詩答之」の「遠贈」、及び(21)「崔湖州贈紅石琴薦煥如錦文、無以答之、以詩酬謝」の「贈」である。(21)は湖州刺史崔玄亮

が蘇州刺史白居易に紅石琴薦を贈ったもの。詩題にも詩の本文にも、二人が直接会って手渡したことを示す表現は見当たらない。「贈」字の例外的な用法とすべきであろうか。

### 三 贈答品

白居易の贈物詩に見える贈答品をおおまかに分類すれば以下のようである。「贈」は贈物、「受」は受物。Ⅱの前は原文、後はその訳。括弧内の数字は作品数。各品目の中の配列は表の順。表Ⅰ・表Ⅱを合わせて示す。

衣料品 贈…生衣（穀衫・紗袴）Ⅱ夏のひとえ（ちぢみの衣・う

す絹の袴）

寒衣Ⅱ冬着

裘（呉綿・桂布）Ⅱわたいれ<sup>18</sup>（呉産の綿・桂州産の布）

受…紫霞綺Ⅱ紫のあや絹

緑糸布・白軽裕Ⅱ緑の布・白紗のうすもの

緋袍Ⅱ緋色のうわぎ

舞衫Ⅱ舞の衣服

秋衣Ⅱ秋用の衣服

霞綺Ⅱあや絹

衣裳Ⅱ衣服

帛Ⅱきぬ織物

履Ⅱくつ（女性から贈られた刺繍のあるくつ）

烏紗帽Ⅱ黒いうす絹の帽子

春服Ⅱ春用の衣服

霜紬Ⅱしろ絹

食料品 贈…胡餅Ⅱ胡麻つきのシャオピン（焼餅）

荔枝（二）Ⅱレイシ

受…新蜀茶（二）Ⅱ蜀産の新茶

箬下酒（三）Ⅱ箬溪産の酒

五醖酒Ⅱ蘇州の酒

茶（二）Ⅱ茶葉（一は常州の茶葉）

糯米Ⅱもち米

春茶Ⅱ春摘みの茶葉

糧Ⅱ食料

嘉慶李Ⅱ洛陽の嘉慶坊に植わっていたスモモの木

楚醴Ⅱ揚州の酒

医薬品 贈…大通中散・碧腴垂雲膏Ⅱ薬（こな薬・ねり薬）

受…金石凌Ⅱ疫病を防ぐ薬

薬（二）Ⅱ薬

日用品 贈…鏡Ⅱ鏡

蕲州簾Ⅱ蕲州産のたかむしろ

銀匙Ⅱ銀のさし

銀榼Ⅱ銀の酒壺

受…銀觥||銀の酒杯

銀杯||銀の酒杯

鏡||鏡

趣味品 贈…木蓮花図||木蓮の花の絵

郡楼登望図||杭州眺望の絵画

受…竹画||竹の絵

紅石琴薦||紅石でできた琴を載せる台

箏(二)||こと

青苔石||青苔の生えた石

磐石||平らな石

動物 贈…鶴||飼いの鳥の鶴

受…馬(二)||馬

鶴||華亭の鶴

白馬||白馬

その他 受…魚袋||魚形の符契を入れた袋

衣食資||衣服や食品などの物資

酒銭||酒代

贈答品には衣料品(布・絹・衣服等)と食料品(酒・茶・米等)

が多く、医薬品も目に付く。簞などの日用品も含まれ、全体として生活に有用な実用品が多くを占めると言える。いまこれを合山究氏が梅堯臣・蘇軾・黃庭堅を主として調査作成された北宋詩に登場する贈答品の分類整理表(注(1)論文。以下、「北宋詩分類表」と称

する)と比較してみよう。北宋詩分類表は「文房四宝・趣味品・酒・茶・花木・果実・日用嗜好品」およびその他からなる。このうち文房四宝はもともと宋人の趣味を体現する物品であるが、白居易の贈物詩には文房四宝に相当するものは一点もない。逆に、北宋詩分類表には、白居易に多い衣料品に属する物品の分類項目は立てられていない。立てるだけのまつまりがないためと思われる。ただし、趣味品の中に「絹・紗帽・蒲団・氈裘」といった物品名が見えるので、ここから衣料品に属する物品を拾い上げることができるが、かりに拾い上げたとしても、梅堯臣では一四三首中四首、蘇軾では一七首中五首、黃庭堅では一四七首中五首にすぎない。割合の上では、白居易の場合と大きな違いがあると言えよう。薬は白居易の贈答品の中では数が多いわけではないが、貴重な物品となっている。これに対して北宋詩分類表では、梅堯臣に「山薬」「茯苓」、蘇軾に「長松(葉草)」、黃庭堅に「鍾乳(道家鍊金の薬)」とあるのが目に付くくらいで、贈答品全体に対する割合はきわめて小さい。これも、白居易の贈答詩に見られる物品が実用品中心であることを示している。

一方、箏や石<sup>19)</sup>は趣味品と言ってよく、元宗簡に贈った木蓮花の絵や蕭悦から贈られた竹画などの絵画もこれに含まれる。絵画や石の類は北宋詩分類表では趣味品の項に少なからず見えており、この点では白居易の詩は宋詩の先駆と言ってよい。白居易の贈物詩に贈・受ともに絵画が含まれるのは、自ら「天與の好事」(19)「畫竹歌并引」と称するほどに絵画を愛好した白居易にふさわしい。

白居易と北宋詩とで著しくことなるのは、文房四宝を別とすれば、北宋詩分類表では日用嗜好品の中に多くの魚介類が含まれる（とくに梅堯臣）のに対して、白居易にはそれがまったくないことであろう。この相違には、食生活のありようや生ものの輸送手段の問題など、幾つかの要因があるものと思われる。その点、同じく飲食に関わる物品でも、保存がきき、運搬にも適する酒茶については両者に共通して多く贈答の対象となっている。また、馬と鶴については、白居易の詩においては大きな話題となる贈答品であるが、北宋詩にあつては梅堯臣・蘇軾・黄庭堅ともに見当たらず、わずかにその他の詩人の欄に「鶴」と「馬」とが挙げられるのみである。

以上のように、白居易の詩に登場する贈答品は、これを北宋詩と比較するならば、衣料品・食料品・医薬品などの実用品が中心であるとともに、筆・石・絵画などの趣味品に宋代の先駆となる特色を認めることができる。<sup>(21)</sup>

ところで、先に指摘したように、白居易の贈物詩は遠方にある相手との贈答が主であった。そのことを反映して、贈られる物品は贈り手が地方の任地にある場合はしばしばその土地の名産品である。以下に朱氏『箋校』、謝氏『校注』等の指摘を参照しつつ数例を挙げよう。

〈**簪下酒**〉 湖州の西北を流れる簪溪の水から作られる酒。『元和郡県志』卷二五、湖州の条に「簪溪水、釀酒甚濃、俗稱簪下酒」とある。<sup>(22)</sup>白居易は前後して湖州刺史となつた錢徽と崔玄亮の二人から贈られている（18）（42）。

〈**蕲州簾**〉 蕲州は江州から長江とその支流である蕲水を計百キロほどさかのぼつた地。簾は竹で編んだむしろ。江州の白居易は通州の元稹にこれを贈っている（07）。『新唐書』卷四一、地理志、淮南道に「蕲州蕲春郡、上。土貢、白紵・簾……」とあり、簾が当地の貢物であつたことが記される。<sup>(23)</sup>

〈**蜀茶**〉 蜀茶は蜀の蕭員外（03）、忠州の李宣（08）、梓州の楊汝士（29）などから贈られている。蜀が茶の名産地であつたことは、『蔡寬夫詩話』に「唐以前茶、惟貴蜀中所産。……唐茶品雖多、亦以蜀茶爲重」とあるなど、諸書に記載がある。布目潮風氏は（08）謝李六郎中寄新蜀茶に見える「蜀茶」について、白居易の他の詩にも登場する「蒙茶」「蒙頂茶」のことと指摘される。「蒙頂茶」は成都西南の蒙山山頂に産し、蜀茶の代表とされる。

〈**常州茶**〉 茶は常州の楊虞卿も洛陽の白居易に贈っている（25）。常州の茶もまた名品であつたことについては、陸羽の『茶経』（百川学海）所収）巻下に「浙西以湖州上、常州次」とある。<sup>(24)</sup>

〈**荔枝**〉 荔枝が南方の特産であることは知られる通りである。白居易は忠州刺史のとき、万州の楊帰厚に贈っている（15）（16）（15）の冒頭に「奇果標南土」と言い、「荔枝圖序」（100）の序に「荔枝生巴峽間」と言う。当時、荔枝の産地として知られたのは涪州であるが、涪州に隣接する忠州もまた荔枝を産したのである（資料篇（15）参照）。

このようにその土地の特産品が贈答された背景には、唐代の詩人はしばしば地方官として遠地に赴任したこと、官吏の立場として土

貢としての物産に関心が向いたこと<sup>(27)</sup>、などが指摘される。このように赴任地の特産物を遠方から時間をかけて贈る行為は、詩人間の交遊をより深めるゆえんとなったであろう。(01)に「千里故人心鄭重」と距離を言い、(02)に「道路迢迢一月程」と時間を言うのは、相手に対する思いの深さを距離や時間によって具体的に表現するものである。

#### 四 附詩・謝詩・唱和詩

先に記したように、白居易の贈物詩三四首のうち白居易の側から物品を贈ったときの詩、すなわち贈物附詩は一四首であり、他の二〇首は人から受け取ったときの受物謝詩であった。贈物詩全体に対する附詩の割合は四割に達する。白居易以前の唐詩においては圧倒的に謝詩が多く附詩は少ないことについては、すでに高兵兵氏に指摘がある。高氏の作品数調査には一部修正を要する点もあるが、しかし全体的傾向としては右の指摘は首肯される<sup>(28)</sup>。白居易の贈物詩が四割り近くの附詩で占められるのは大きな特色であり、白居易が実生活においては友人親戚に対する物品贈答を好み、かつそれを積極的に詩のテーマとして取り上げたことを意味する。

白居易以後の唐詩においても、全体として謝詩の数が附詩を凌駕することに変わりはない。個人を例に挙げれば、唐詩においてもっとも多い四〇首余りの贈物詩を伝える晩唐の齊己の場合、附詩はわずか二首にすぎない<sup>(29)</sup>。しかしながら、これを謝詩の数に対する附

詩の数の割合について見るならば、白居易以後には附詩の割合があまりに増加する。今、大まかな数字で言えば、白居易以前の唐詩では謝詩六〇首余りを数えるの対して附詩は一〇首、以後においては謝詩百首余りに対して附詩は二八首を数えることができる。白居易以後の附詩は以前に比べて作品数において三倍近く、謝詩に対する割合にして約一・七倍余りの増加を示しているのである<sup>(30)</sup>。個人についてみても、晩唐の皮日休(八三四?~八八三?)は謝詩六首に對して附詩四首を伝え、同じく晩唐の韓偓(八四二~九一四?)は謝詩二首に對して附詩三首を伝える<sup>(31)</sup>。さらに宋代においては、坂井多穂子氏によれば梅堯臣の詩のほとんどが「受」であるのに対して、蘇軾・黃庭堅の詩では「贈受ほぼ相半ばする」(注(3)論文二四頁)。宋代についてはなお筆者の調査が及ばないが、はなはだ大まかに言うならば、贈物詩は中晩唐頃から徐々に増加傾向を示す(この点は本稿冒頭に記したようにすでに合山氏に指摘がある)とともに、附詩の割合も増加していき、宋代においては附詩・謝詩相半ばする大詩人が出現するにいたる、ということになる。以上を踏まえて言うならば、白居易の贈物詩は、生涯の折々に継続して作られ続けた点、作品数が相当数にのぼる点、謝詩に対する附詩の割合が四割に達する点、贈物詩贈答の相手が多数の知友に及ぶ点等において唐詩に前例のない特色を持つとともに、附詩の割合の多さについては宋詩に先駆けるものと言えよう。

次に、謝詩二〇首についてであるが、二〇首にはこれに先立って物品の贈り手による附詩があったであろうか。もし物品を受け取っ

たときにすでに詩が添えられており、白居易はそれに対して唱和酬答しただけであるならば、白居易が好んで贈物詩を創作したということとはできない。いま、二〇首の詩題と詩本文の表現を点検するに、附詩の存在が確認されるのは白詩の詩題中に贈り手の附詩の一部が引用される(27)(28)の二首と、引用はないもののその存在が記載される(31)(32)の二首のみである。具体的に言えば、(27)の詩題「偶於維陽牛相公處覓得箏、箏未到、先寄詩來、走筆戲答(來詩云「但愁封寄去、魔物或驚禪」)」に含まれる括弧内の自注に引用される「來詩」は、牛僧孺から寄せられた附詩(逸詩)を指している。(28)「酬裴令公贈馬相戲(裴詩云「君若有心求逸足、我還留意在名姝。」蓋引妾換馬戲、意亦有所屬也)」にも「裴詩云」以下に裴度の附詩(逸詩)が引用される。(31)「病中辱崔宣城長句寄見、兼有觥綺之贈、因以四韻總而酬之」は詩題に「長句寄見」とあるから、附詩(今逸)の存在が知られる。(32)「繼之尚書自余病來寄遺非一、又蒙覽醉吟先生傳、題詩以美之、今以此篇用伸酬謝」は、長安の楊嗣復(字は繼之)から「茶藥・衣裳」を贈られたこと、及び楊嗣復が白居易の「醉吟先生傳」を読んで詩を題してくれたことを謝する作。楊嗣復の詩(今逸)は直接には白居易の「醉吟先生傳」の読後感を記す内容であったであろうが、「茶藥・衣裳」とともに贈られていることから見て、贈物附詩に類するといつてよいであろう。以上四例が白詩の謝詩の表現から贈り手の附詩の存在が認められる作である。他の一六首については、やや判断に迷う作もあるが、物品の送り手からの詩が添えられていたことを示す明確な文言は見出すことができ

ない。<sup>33)</sup>これらについては、物品の受け手である白居易の側がまず最初に謝詩をあらわしたと考えられる。ここに、謝詩の創作に対する白居易の積極性を見てよいであろう。

ところで、物品の贈答にともなう贈物詩は、当事者による附詩・謝詩のやりとり(附詩か謝詩の片方しか現存しない場合も多い)に止まらず、その後に唱和詩を伴うことがある。そのさい唱和詩は当事者によって作られるのみならず、当事者以外の者によって作れることがある。物品の贈答についても、受け手がお返しの商品を贈ることがあり、そのことがまた詩によまれる場合がある。贈物詩はこれに続く唱和詩を生み、あるいはさらなる物品の贈答を誘い出し、詩の創作の場を押し広げることになるのである。いま、当事者間でもやり取りされる附詩・謝詩を狭義の贈物詩とするならば、その後の唱和詩や当事者以外による唱和詩は広義の贈物詩としてよいであろう。白居易とその周辺の詩人達の間にはこのいずれも見られ、贈物詩が物と詩の両面において詩人間の交遊に深く関わっている様相を見て取ることができる。以下に簡略ながら具体例を挙げることにするが、あらかじめ表Ⅰをもとに、附詩・謝詩・唱和詩の動きを中心に整理し直した一覧表を表Ⅲとして示す。

#### 〔表Ⅲ〕

「贈り手」と「受け手」の間の矢印は物品の、附詩・謝詩・唱和詩の間の矢印は詩の贈答関係を示す。空欄は該当する詩が現存しないか、当初から作られていないことを示す。附詩の空欄については、

当初から詩が作られなかった可能性が大きい。謝詩の空欄については、〈04〉の少年、〈12〉の康叟については当初から作られなかったと思われる、〈17〉の阿亀は父の行簡がかわって謝詩を寄せたであろう。これ以外の謝詩の空欄については、伝わらなかったものと推測される。唱和詩の空欄については、作られなかった場合、伝わらなかった場合、ともに考えられる。〈31〉〈32〉の( )については後文参照。

|         |   |     |   |     |   |     |
|---------|---|-----|---|-----|---|-----|
| 〈01〉庾敬休 | ↓ | 白居易 | ↑ | 謝詩  | ↑ | 唱和詩 |
| 〈02〉白居易 | ↓ | 元 稹 | ↑ | 元 稹 |   |     |
| 〈03〉蕭員外 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |   |     |
| 〈04〉白居易 | ↓ | 少 年 | ↑ | 白居易 |   |     |
| 〈05〉李 建 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |   |     |
| 〈06〉白居易 | ↓ | 元 稹 | ↑ | 元 稹 |   |     |
| 〈07〉白居易 | ↓ | 元 稹 | ↑ | 元 稹 |   |     |
| 〈08〉李 宣 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |   |     |
| 〈09〉元宗簡 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |   |     |
| 〈10〉元 稹 | ↓ | 白居易 | ↑ | 元 稹 |   |     |
| 〈11〉裴 堪 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |   |     |
| 〈12〉白居易 | ↓ | 康 叟 | ↑ | 白居易 |   |     |
| 〈13〉白居易 | ↓ | 楊焜厚 | ↑ | 白居易 |   |     |
| 〈14〉白居易 | ↓ | 元宗簡 | ↑ | 白居易 |   |     |
| 〈15〉白居易 | ↓ | 楊焜厚 | ↑ | 白居易 |   |     |

|         |   |     |   |     |  |      |
|---------|---|-----|---|-----|--|------|
| 〈16〉白居易 | ↓ | 楊焜厚 | ↓ | 白居易 |  |      |
| 〈17〉白居易 | ↓ | 阿 亀 | ↓ | 白居易 |  |      |
| 〈18〉錢 徽 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |  |      |
| 李 諒     | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |  |      |
| 〈19〉蕭 悅 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |  |      |
| 〈20〉白居易 | ↓ | 張 籍 | ↑ | 張 籍 |  |      |
| 〈21〉崔玄亮 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |  |      |
| 〈22〉白居易 | ↓ | 裴 度 | ↑ | 白居易 |  | ↑劉禹錫 |
| 〈23〉白居易 | ↓ | 裴 度 | ↑ | 白居易 |  |      |
| 〈24〉劉禹錫 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |  |      |
| 〈25〉楊虞卿 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |  |      |
| 〈26〉劉禹錫 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |  | ↑劉禹錫 |
| 李 紳     | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |  |      |
| 〈27〉牛僧孺 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |  |      |
| 〈28〉裴 度 | ↓ | 白居易 | ↑ | 裴 度 |  | ↑劉禹錫 |
| 〈29〉楊汝士 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |  |      |
| 〈30〉李 紳 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |  |      |
| 〈31〉崔龜從 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |  |      |
| 〈32〉楊嗣復 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |  |      |
| 〈33〉南 卓 | ↓ | 白居易 | ↑ | 白居易 |  |      |

まず、物品贈答の当事者間で、謝詩のあとに唱和詩がよまれた例として〈10〉〈26〉を挙げることができる。〈10〉は通州の元稹から贈ら

れた「綠絲布・白輕裕」に対する謝詩であるが、元種の附詩はなく、白居易の謝詩に対する元種の唱和詩が残されている。(26)は蘇州の劉禹錫が「糯米」を、越州の李紳が「舞衫」を贈ってくれたのに対する謝詩であり、劉・李のいずれにも附詩はないが、白居易の謝詩に対する劉禹錫の唱和詩が残されている。以上二例とも物品の贈り手による附詩はなく、受け手である白居易の謝詩がよまれてのち初めて贈り手によって唱和詩が返された例である。白居易が贈り手であった場合、附詩を作らず、かつ贈られた相手の謝詩のみが残されている、という例は見出すことができない。

次に当事者以外の者が唱和詩をよんだ例には(22)と(28)がある。(22)については後で取り上げる。(28)は裴度が馬とともに戯れの詩を贈ってくれたのに答える謝詩で、この謝詩に対して友人の劉禹錫が唱和詩「裴令公見示酬樂天寄奴買馬絕句、斐然仰和、且戲樂天」(『箋証』外集卷四、一二六四頁)を裴度と白居易に贈っている。

表Ⅲには現れないが、白居易自身が友人間でやり取りされた贈物詩に唱和している例については、以下が挙げられる。李蘇州(朱氏『箋校』二三五〇頁によれば、蘇州刺史李道枢)が牛僧孺に太湖石を贈ったのに対して牛僧孺が「李蘇州遺太湖石、奇狀絶倫、因題二十韻、奉呈夢得樂天」(全唐詩卷四六六、五二九一頁)を劉禹錫と白居易に呈し、これに対して劉禹錫が「和牛相公題姑蘇所寄太湖石、兼寄李蘇州」(『箋証』外集卷六、一三七六頁)を、白居易が「奉和思黯相公以李蘇州所寄太湖石奇狀絶倫、因題二十韻見示、兼呈夢得」(3362・2508)をかえしている。当事者の一人である李蘇州の詩は

残されていないが、いま一人の牛僧孺が劉・白に詩を呈したことにより、新たな唱和者が加わったわけである。物品の贈答が友人間に新たな唱和詩を生み出していった一例である。いま一つ、張籍が裴度から馬を贈られたさいの謝詩に裴度が唱和し、さらに白居易等六名が唱和したという例も数えることができよう。<sup>24)</sup>もとよりこのような唱和のありかたは贈物詩に限ったことではないが、詩人間の唱和が盛んとなった中唐において贈物詩もまた徐々に増加していったことは偶然ではない。両者はともに、詩人間の交遊を土台としているからである。

物品の贈答がお返しの際の贈答を生んだと思われる例は、忠州の白居易と万州の楊帰厚との間に見られる。(15)は楊帰厚に荔枝を贈ったときの附詩であるが、これに対する楊帰厚の謝詩は残されていない。しかし、再度楊帰厚に荔枝を贈ったさいの詩(16)に「時に楊使君種植せんと欲すと聞く。故に落句の之に戯る有り」とあり、尾聯に「聞道萬州方欲種、愁君得喫是何年」(君は荔枝を万州に植えようとしているのだが、実がなつて口にできるのはいつのことだろうね、在任中に間に合えばいいが)とからかっているのは、(15)に対する楊帰厚の謝詩ないし礼状の中に万州で荔枝を植えようとしていることが記してあったからに違いない。そして、『白氏文集』の配列ではこの詩の直後に「和萬州楊使君四絶句」があり、その三首目(39)「嘉慶李」に「東都綠李萬州栽、君手封題我手開」(君は洛陽から持ってきたスモモを万州で植え、それを手ずから封して私に贈ってくれた)とあって、楊帰厚が白居易に洛陽の李を贈っているこ

とが分かる。これは白居易が荔枝を贈ってくれたのに対する返礼と考えられる。(39)に先立つ楊焜厚の詩は残されていないが、白詩の詩題に「和」<sup>36</sup>とある以上、楊焜厚の原唱が存在し、かつこれが白居易に寄せられたことは疑いがない。物品の贈答がお返し<sup>37</sup>の贈答を生み、それに伴ってさらに詩が唱唱された一例である。

同様の例は白居易の友人劉禹錫と元稹の間にも認められる。劉禹錫の「贈元九侍御文石枕、以詩獎之」(『箋証』外集卷五、一二八五頁)は元稹に「文石枕」(文様のある石の枕。一説に、瑪瑙の枕)を贈ったさいの附詩であり、これに対して元稹は「劉二十八以文石枕見贈、仍題絕句以將厚意、因持壁州鞭酬謝、兼廣爲四韻」(『元稹集』卷一八、二〇六頁)と題する謝詩を返している。文石枕のお礼に壁州の鞭を贈り、あわせて律詩を添える、というのである。元稹の謝詩は、「壁州鞭」を贈る立場から言えば同時に劉禹錫に寄せる附詩となる。そして、この元稹の作に対して今度は劉禹錫が唱和詩「酬元九侍御贈壁州鞭長句」(『箋証』外集卷五、一二八六頁)を返している<sup>38</sup>。これもまた、物品の贈答がお返しを生み、同時に詩が唱和された例である。

最後に、右に挙げたさまざまなケースが複合した例を挙げよう。  
 (22)「送鶴與裴相臨別贈詩」は裴度に乞われた鶴を贈るにあたってよまれた作であるが、これに劉禹錫が唱和詩「和樂天送鶴上裴相公別鶴之作」(『箋証』外集卷一、一〇七〇頁)をよんでいる。この白居易から裴度に贈られた鶴をめぐるのは、その前に裴度が白居易に鶴を譲ってくれるよう求めてきた詩「白二十二侍郎有雙鶴留在洛下、

予西園多野水長松、可以棲息、遂以詩請之」(全唐詩卷三三五、三七五五)があり、これに対して白居易が答えた唱和詩「答裴相公乞鶴」(2586・1787)があり、さらに劉禹錫の唱和詩「和裴相公寄白侍郎求雙鶴」(『箋証』外集卷一、一〇六九頁)、及び張籍の唱和詩「和裴司空以詩請刑部白侍郎雙鶴」(全唐詩卷三八四、四三二二頁)が続く。そして、その後には先の(22)の白詩がよまれているのであり、白・裴・劉・張四者はこれらの経緯をお互いに承知したうえで作詩している。しかも、これらのやり取りには、右にあげたすべての詩に先立つて鶴を巡る白居易と劉禹錫の唱和詩がそれぞれ存在しており、逆にその四年後には劉禹錫が、鶴を手放して寂莫たる白居易に別の鶴を贈るという後日譚が付け加わる。(24)の「劉蘇州以華亭一鶴遠寄、以詩謝之」は四年後に鶴を贈られた白居易による謝詩にあたる。以上、鶴の贈答を巡る白居易等の酬唱についてはすでに幾つかの先行論文<sup>36</sup>があり、詳細はそれに譲るが、詩人間における物品の贈答が狭義・広義の贈答詩を生み出し、それとともに新たな物品の贈答と詩の唱和を引き出したという興味深い例である。

右の鶴を巡る贈答に関連していま一つ付け加えるならば、高兵兵氏は人に物を乞う詩を「乞物詩」と名づけられ、広い意味では贈物詩の類に入れるべきであろうと指摘される。前段に挙げた裴度の詩「白二十二：遂以詩請之」は高氏の言う乞物詩に相当する。物を乞う詩は単独で残されている場合もあるが、当然のことながら裴度の詩のようにその後実際に、乞われた鶴の贈答がなされ、それに伴って贈物詩・唱和詩がやりとりされるという展開に発展する場合

もあるものであり、これを広義の贈物詩に含めて考察することが必要であろう。白居易にも南隣に酒を求める詩「病中贈南鄰覓酒」(3279・2425)があり、また「早飲湖州酒寄崔使君」(3338・1541)は酒の再度の送付を請う詩である(資料篇(42)参照)。晩唐詩から一例を挙げるならば、貫休(八三二〜九一一)に盧少卿に千字文を求める詩「上盧少卿覓千文」があり、これに続いて実際にこれを受け取ったのちの謝詩「謝盧少卿惠千文」(全唐詩卷八二七、九三二四頁)があるのは、物を乞う詩と贈る詩とが一連のものであることをよく示している。贈物詩の前に時に乞物詩があり、後に時に唱和詩がある。こうして、物品贈答を巡る詩の酬唱は、白居易の時代を境に多様な広がりを見せていくのである。

## 五 おわりに

本稿では、物品贈答に関わる白居易の詩、すなわち贈物詩を網羅的に取り上げ、これを贈物附詩・受物謝詩に分ち、贈物と受物の出現情況、用いられる詩型と詩題、贈答の相手と任地、贈答品の種類と特色及び北宋詩との比較、附詩と謝詩の割合、当事者以外による唱和詩の広がり等について基礎的な検討を試みた。言うまでもなく、贈物詩は物品を贈答する相手との交遊ないし何らかの関係なくしては成立しない。しかしまた、物品贈答の行われるところ、常に附詩・謝詩がともなうわけではない。その意味で、白居易が贈物にあたっては積極的に附詩をよみ、受物においても同じく積極的に謝

詩をあらわしたこと、そしてその結果として唐詩において一つのまとまりある作品群を残し、宋詩につながる特色をも示したことは、文学史的に見て意義があると考ええる。そのさい、交遊をもった白居易周辺の詩人たちとその贈物詩・唱和詩が重要な役割を果たしたことは言うまでもない。

本稿では、白居易の一首一首の贈物詩の内容上・表現上の特色については論じることができなかった。改めて検討が必要である。また、白居易には贈物詩以外にも物品を介した交遊をうたう詩が多数存在する。総じて白居易の詩には「贈」という行為に着目した作品が少なくなく、この点で一つの特色を成していると筆者は考えるが、これらの問題についても今後の課題である。<sup>(30)</sup>

## 注

(1) 合山究「贈答品に関する詩にあらわれた宋代文人の趣味的交遊生活」(『中国文学論集』第二号、九州大学中国文学会、一九七一年)二三頁参照。六朝詩における物品贈答と詩については、矢嶋美都子「庾信の「蒙賜酒」詩について」(『日本中国学会報』第三四集、一九八二年。のち『庾信研究』所収。明治書院、二〇〇〇年)に、「蒙賜酒」など酒を下賜されたことへの謝辞を述べる庾信の詩は従来の詩には無い新たなテーマを有していること、そもそも「酒に限らず物を贈られた礼を述べるのは、従来は表・啓・書・帖・牋等の散文の領域のテーマであった」(『庾信研究』九五頁)ことなどが指摘されている。同論文には、漢魏六朝の、物

を贈られたことへの礼を述べる散文について、その作者・文体・物品名等の一覧表が示される。道坂昭廣「六朝の謝啓について」〔中国文学報〕第六九冊、二〇〇五年)は、今日の礼状にあたる「謝啓」について漢から隋までの作品を網羅して一覧表とし、その表現上の特色と文体の盛衰について考察する。

(2)「白居易の詩と贈答品」は「新釈漢文大系季報」No.102(明治書院、二〇〇五年)所収。本稿は季報に記した内容と一部重なるところ、及び訂正するところがあることをおことわりする。

(3)坂井多穂子「梅堯臣の贈受品詩について」〔中唐文学会報〕第八号、中唐文学会、二〇〇一年)参照。

(4)高兵兵「菅原道真の(贈物詩)をめぐって」〔中古文学〕第七八号、二〇〇六年)による。本論文中には白居易の贈物詩として、「寄生衣與微之因題封上」(0847・0843)、「初除官蒙裴常侍贈鵲銜瑞草緋袍魚袋因謝惠貺兼抒離情」(1091・1084)、「寄胡餅與楊萬州」(1124・1116)の三首が取り上げられる。三首は本稿表Iの(06)×(11)×(13)に当たる。なお、右のように白詩の詩題のあとに示した数字は、この順に、花房英樹『白氏文集の批判的研究』(朋友書店、一九七四年再版)所収「綜合作品表」による作品番号と、謝思煒撰『白居易詩集校注』(中華書局、二〇〇六年)に記される作品番号である。

(5)張浩遜著『唐詩分類研究』(江蘇教育出版社、一九九九年)第二章「唐代的酬謝詩」参照。なお張氏は、酬謝詩は唐詩に二百首余りあるが、これに論及するものはきわめてまれだと研究の

現状を指摘する。

(6)唱和詩をめぐる「贈答」と「唱和」の別についてなど、関連する検討課題については、橘英範「中唐唱和詩研究の問題点」〔中国中世文学研究〕第二二号、中国中世文学研究会、一九九二年)に先行論文の紹介を含めて詳しく論じられている。また、近時刊行された陳鍾琇著『唐代和詩研究』(秀威資訊科技股份有限公司、二〇〇八年)参照。

(7)表Iの(23)は詩題に「因題兩絶句」とあるように二首連作。したがって、詩の数は三四首、贈答の数は三三例となる。本稿では物品贈答に関わる詩を比較的広く収集したが、贈物詩に詩歌の贈答を含めないことは無論のこと、詩人の間で行われた詩巻の贈答も取り上げなかった。たとえば、元和五年の作「和答詩十首」の序(0100・0100)に、元稹が左遷されて江陵に赴く日、弟に見送らせるとともに「新詩一軸」を贈ったことが記され、その五年後の作「編集拙詩成一十五卷、因題卷末、戲贈元九李二十」(1006・1000)の自注に「元九向江陵日、嘗以拙詩一軸贈行、自是格變」と「拙詩一軸」を餞別としたことが再度記される。これは詩巻の贈呈に当る。また、「張十八員外以新詩二十五首見寄、郡樓月下、吟玩通夕、因題卷後、封寄微之」(9317・1590)は張籍が新作の詩二十五首を贈ってくれたので夜通し読み、その後張籍の詩に自分の詩を添えて元稹に転送したことを言う(この詩には張籍・元稹の次韻詩がある)。「二十五首」であればまとまった分量の詩巻と言えよう。さらに、白居易と元稹の間でやりとりされ

た「詩筒」はよく知られているが、「詩筒」もまた物品である。しかしながら、一般的な詩の贈答とこれらの詩巻・詩筒の贈答との間に明確な境界を設けることは難しく、本稿ではしばらく贈物詩には含めないこととする。ただし、晩唐の齊己には「謝高輩先輩寄新唱和集」(全唐詩卷八四一、九四九九頁)などのように人から詩集を贈られたことを謝する詩が一首余り残されており、詩集が贈答品の一種としてうたわれている例が見られるし、宋詩について注(一)合山氏論文では梅堯臣の欄に「詩巻」「近詩六十篇」を挙げていることなどから、詩巻の扱いについてはなお再考の余地を残す。

(8) 劉禹錫の贈物詩一三首を瞿氏『箋証』によって掲げる。物品贈答に関わる詩であっても、劉禹錫自身が贈答の当事者ではない場合の唱和詩は除く。七絶は⑤⑧⑨⑩⑪、七律は②③④⑥、五律は⑦⑫⑬、五古は①。なお、附詩は⑤のみ。④は劉禹錫自身が贈り手であるが附詩を作らず、白居易の謝詩に唱和した作。その他は謝詩。

- ①「崔元受少府自貶所還遺山薑花、以詩答之」(卷二三、六四七頁)
- ②「衢州徐員外使君遺以縞紵兼竹書箱、因成一篇、用答佳贖」(卷二四、六八三頁)
- ③「唐秀才贈端州紫石硯、以詩答之」(卷二四、六八四頁)
- ④「酬樂天衫酒見寄」(外集卷四、一二一九頁)
- ⑤「贈元九侍御文石枕、以詩獎之」(外集卷五、一二八五頁)
- ⑥「酬元九侍御贈壁州鞭長句」(外集卷五、一二八六頁)

- ⑦「南海馬大夫見惠著述三通勒成四帙、上自邃古達於國朝、采其菁華、至簡如富、欽受嘉贖、詩以謝之」(外集卷五、一三〇六頁)
- ⑧「吳興敬郎中見惠斑竹杖、兼示一絶、聊以謝之」(外集卷六、一三五九頁)

- ⑨「洛濱病臥、李侍郎見惠藥物、謔以文星之句」(外集卷六、一三六八頁)

- ⑩「裴侍郎大尹雪中遺酒一壺、兼示喜眼疾平一絶有閒行把酒之句、斐然仰酬」(外集卷六、一三八三頁)

- ⑪「酬柳柳州家雞之贈」(外集卷七、一四二二頁)

- ⑫「謝柳子厚寄疊石硯」(外集卷八、一四七二頁)

- ⑬「謝宣州崔相公賜馬」(外集卷八、一四七二頁)

元稹の贈物詩九首を『元稹集』冀勤点校、中華書局排印、一九八二年)によって掲げる。七律は③④⑥⑦⑨、七絶は②⑤⑧、五排は①。なお、附詩は②⑤。⑦は白居易の謝詩に対する唱和詩。その他は謝詩。

- ①「酬樂天寄蘄州簾」(卷一五、一七八頁)

- ②「贈李十二牡丹花片、因以餞行」(卷一七、一九二頁)

- ③「予病瘴、樂天寄通中散・碧腴垂雲膏、仍題四韻、以慰遠懷開拆之間、因有酬答」(卷一七、二〇二頁)

- ④「劉二十八以文石枕見贈、仍題絶句、以將厚意、因持壁州鞭酬謝、兼廣爲四韻」(卷一八、二〇六頁)

- ⑤「折枝花贈行」(卷一八、二〇九頁)

- ⑥「三兄以白角巾寄遺髮不勝冠、因有感歎」(卷二〇、二三〇頁)

- ⑦ 「酬樂天得種所寄紵絲布・白輕庸、製成衣服、以詩報之」(卷二一、一三三頁)
- ⑧ 「酬樂天寄生衣」(卷二一、二三六頁)
- ⑨ 「和張秘書因寄馬贈詩」(卷二六、三二七頁)
- (9) 注(3) 坂井氏論文二六頁によれば、北宋・梅堯臣の贈答品に関する詩一四五首のうちもっとも多いのは五言律詩の四五首であり、七言律詩は八首に過ぎない。また、梅堯臣が親密な相手に贈る詩は比較的長編の五言古詩とされ、この詩型は五律について多い三五首に用いられる。これらの点は、白居易の詩ないし唐詩とは相違がある。この相違が梅堯臣個人の特質によるものなのか、時代による差違なのかなどについては、今後の調査をまたなければならぬ。
- (10) 杜甫に「謝嚴中丞送青城山道士乳酒一瓶」(中華書局排印『杜詩詳注』卷一一、八九六頁)がある。
- (11) この詩題、『全唐詩』の注記に「一作蒙裴相公賜馬、謹以詩謝」とあるのは、『文苑英華』卷三三〇による。注(34)参照。
- (12) 注(1) 道坂氏論文の「謝啓一覧」参照。謝啓は目上の人からの下賜品に対する礼状であることが多いために、「謝々賜々」「謝勅賜々」「謝々資々」「謝勅資々」等の表現がしばしば用いられる。
- (13) 丸山茂氏は「白氏交遊録―元宗簡―」(『研究紀要』第五六号、日本大学文学部人文科学研究所、一九九八年)において、呉汝煜主編『唐五代人际交往詩索引』(上海古籍出版社、一九九三年)により、白居易の詩に登場する詩友一六名を、関係する詩の作品

数とともに列挙しておられる(二六頁)。この一六名のうち、白居易の贈物詩に関わった詩人は、元稹・劉禹錫・裴度・李紳・崔玄亮・牛僧孺・元宗簡・楊汝士・錢徽・張籍・李建の一名にのぼる。また、白居易と関わりのある作品は、元稹の三五五首を筆頭として、李建の二六首に及ぶ。いま丸山氏にならって『唐五代人际交往詩索引』により、右の一名以外で白居易の贈物詩に登場する人物九名について同様の調査を行ったところ、左の結果を得た。( )内は関係する作品数。

楊焯厚(一一)、楊嗣復(一二)、庾敬休(九)、李諒(九)、楊虞卿(六)、崔龜從(五)、蕭悅(三)、南卓(三)、裴堪(二)以上のように、白居易の贈物詩に登場する人物の多くは、粗密はあるものの、白居易とさまざまな関わりの有る友人ないし親族であると言える。

(14) 表Ⅱにのみ登場する人物について言えば、白居易が物品を贈った相手に殷堯藩がおり、贈られた相手に崔群・韋長・美人・嬋娟子・山客がいる。このうち「白居易交遊考」にも取り上げられる崔群は白居易と深い交流をもった人物であり、韋長も「続考」に取り上げられる。殷堯藩は白居易の他の詩にも見えている。

(15) 注(4) 高氏論文三四頁、「道真までの日本贈物詩」一覧表「草」より六例)を見るに、平安漢詩におけるそれは、贈り手と受け手が同一地にいる場合が大半である。これには、唐と平安における、作詩者たる官僚の勤務地のあり方の相違が関係しているで

あろう。なお、高氏の指摘によれば、道真の詩の場合、饞別時の贈物というかたちをとることが多いのは、和歌における饞別ないし形見という発想に類しており、唐詩とは異なった日本の要素が認められるという。

(16) (04)×(11)×(12)×(19)×(22)×(28)×(33)が同一地間での贈答である。

(17) 松浦友久編『漢詩の事典』(大修館書店、一九九九年) 七二七頁「寄・贈」の項参照。

(18) ここに言う「裘」がかわごろもではなく布製の衣服、わたいの類であることについては、資料篇(41)参照。

(19) 七十歳の時に南卓から贈られた「青苔石」(33)は、泉の流れに置いて水音を楽しむために使用されているところからすれば、一種の趣味品である。贈答品ではないが、白居易には別に太湖石に関する詩文「太湖石」(2982・1486)、「太湖石記」(3823)などがあり、石を愛玩していたことが知られる。花房英樹『白居易研究』(世界思想社、一九七一年) 四七三頁に石に対する愛好について触れる。

(20) 馬に関する論文については注(34)、鶴については注(36)参照。

(21) 注(1) 矢嶋・道坂両氏の論文に紹介される漢魏六朝時代以下賜ないし贈答された物品名の中には、すでに多くの食料品(魚介類を含む)・衣料品・薬品・日用品・動植物等が見えている。したがって、白居易等が贈答した物品は、蕪州篔などの地方特産物や木蓮花図・郡楼登望図などの特別に画かせた絵画などを別とすれば、六朝時代に比べて著しくことなつたものではなかったと考

えられる。問題は、その物品を主には遠方にいる友人親族間で贈答し、かつそのことをテーマに詩を創作し唱和しあつた点にあると言えよう。なお、白居易の状に見える下賜品には、「衣服」(1974)、「口蠟」(1977)、「尺」(1978)、「新火」(1979)、「冰」(1980)、「新暦日」(1981)、「茶果梨脯等」(1982)などがある。

(22) 朱氏『箋校』一三四三頁に指摘がある。謝氏『校注』一六〇八頁には、『太平寰宇記』卷九四、湖州の条に引く梁・顧野王『輿地志』に「…村人取下箬水釀酒、醇美勝於雲陽、俗稱箬下酒」とあることが指摘されている。なお、朱氏の引用する『元和郡県志』に「箬溪水」とある「箬」字、賀次君点校『元和郡県志』(中華書局、一九八三年) 卷二五の当該条では「若」に作るが、その注に、清・張駒賢の『攷証』に、「若」字は「竹」を脱するであろうとする説を引く。

(23) 朱氏『箋校』一〇〇〇頁に、蕪州篔に関する複数の資料が挙げられる。これに無い資料を挙げれば、後世の作であるが、歐陽脩に「有贈余以端溪綠石枕與蕪州竹篔、皆佳物也。…」(『歐陽脩全集』卷八、一一二頁、李逸安点校、中華書局、二〇〇一年)と題する詩がある。

(24) 謝氏『校注』一三二六頁に指摘がある。『蔡寬夫詩話』の当該条は、郭紹虞『宋詩話輯佚』(中華書局、一九八〇年) 下册四〇九頁によれば、『苕溪漁隱叢話』前集卷四六と『詩話総龜』後集卷三〇「詠茶門」による。蜀茶は下賜品としても知られていた。

『五代会要』卷一二「休假」の「後唐天成四年五月四日」の条に、

休暇を請う朝臣に茶葉を賜うことが見え、「宜各賜蜀茶三斤」等とある(上海古籍出版社排印『五代会要』二二一頁)。

(25) 布目潮風「白居易の喫茶」(『三上次男博士喜寿記念論文集』歴史編、平凡社、一九八五年)による。布目氏は「蜀茶は『膳夫経』によれば、蜀以外に流通しておらず、白居易が長安・蘇州にて入手した蜀茶・蒙山茶は友人より特別便にて送られたまことに珍重すべき名茶であったと言えよう」(一二五頁)と述べられる。

また(08)の詩について布目氏は、「(一)当時、親友への贈り物に茶が用いられ、とくに病氣見舞いには、茶好きの人には喜ばれていることがわかる。(二)お茶を贈って喜ばれる中でも、新茶はまた格別で、とくに新茶が喜ばれていることがわかる。」「(唐詩と茶―白居易)六八頁、『日本美術工芸』六〇七、一九八九年)と述べられる。その他、布目氏の『緑芽十片 歴史にみる中国の喫茶文化』(岩波書店、一九八九年。のちに増補して岩波現代文庫『中国喫茶文化史』所収)など、中国茶関係の著作参照。また、白詩「新昌新居書事四十韻、因寄元郎中張博士」(1239・1252)に「蠻榼來方瀉、蒙茶到始煎」とある「蒙茶」に関する朱氏『箋校』一二七一頁の注参照。

(26) 唐代の名茶の産地については、布目潮風「唐代の名茶とその流通」(『東方学論集 小野勝年博士頌寿記念』同記念会編、龍谷大学東洋史学研究会、一九八二年)に詳しい。

(27) 白居易には蘇州刺史であったときに献上用の橋を選ぶことをうたう詩「揀貢橋書情」(2441・1644)があり、「洞庭貢橋揀宜精、

太守勤王請自行」(洞庭山から橋を献上するにはよくよく選ばなくてはならず、太守たるわたくしは自らその勤めを果たしにここにやってきた)と言う。もっとも、陳振孫は貢橋を名目に太湖に遊んだのだとしているが(『白文公年譜』敬宗宝曆元年の条。明治書院『白氏文集(九)』三七五頁に指摘がある)、これに続いて「或者唐守臣修貢、皆當躬親、如湖常貢茶故事耶」とあり、唐代の地方官がみずから執り行う仕事だとも言う。

(28) 注(4)高氏論文二五頁に「物を贈る際に添える詩と物を受けて酬答する詩が、五割ずつ見られるのは白居易のみであり、それを除けば、全体的に物を受け取った側の酬答詩が圧倒的に多く、物を贈るのに添える詩が少ないことも指摘できる。」とある。贈と受の割合を「五割」とするのは、同論文に載せる「唐の(贈物詩)数一覽表」(『全唐詩』目次を白居易の巻まで調査)に白居易の受物酬答(本稿に言う謝詩)を九首、贈物附詩を八首と数えるためである。ところで、この一覽表によれば、白居易以前の附詩は柳宗元・張籍の各一首、元稹の二首のみである。しかし、筆者の調査によれば、さらに六首を附詩としてあげることができる。高氏の論文には詩題があげられていないので、柳宗元・張籍・元稹の附詩を含む計一〇首を左に列挙する。詩題の掲出は中華書局排印『全唐詩』により、括弧内にその巻数と頁数を記す。

「寄釋子良史酒」(卷188-1921頁)

「重寄」同前

「將別巫峽、贈南卿兄讓西果園四十畝」杜甫(232-2554)

「寄李袁州桑落酒」郎士元 (248—2787)

「摘櫻桃贈元居士、時在望仙亭南樓、與朱道士同處」柳宗元

(352—3940)

「贈元九侍御文石枕、以詩獎之」劉禹錫 (365—4124)

「贈太常王建藤杖筍鞋」張籍 (384—4320)

「姚秀才愛予小劍、因贈」劉叉 (395—4448)

「贈李十二牡丹花片、因以餞行」元稹 (412—4566)

「折枝花贈行」元稹 (413—4576)

また、高氏の二覧表では、劉禹錫は受物酬答五首、贈物附詩無しとするが、筆者の数えたところでは附詩一首、謝詩一二首（贈物詩の当事者としてよむ唱和詩一首を含む）に上る（注(80)に出）。<sup>(1)</sup>の他、李白三首、杜甫一首（ともに謝詩）と数えるのも少なすぎると思われる（合山氏論文<sup>(2)</sup>は、李白五首、杜甫一首）。  
今後は個々の詩題を掲げた上での整理が必要であろう。

(29) 齊口の附詩は左の通り。

「梓栗杖送人」(全唐詩卷846—9573頁)

「送胎髮筆寄仁公」(同846—9580)

(30) 李白・杜甫・韓愈・劉禹錫・元稹・皮日休・陸龜蒙・韓偓以外は、『全唐詩』の詩題による調査であるが、なお遺漏があるであろう。また、贈物詩に関わる唱和詩を含めるならば、作品数は白居易以前以後とも増加する。なお、『全唐詩』に白居易以前の詩はおおよそ二万首弱（樂府を除く）、以後の詩は二万二千首強（「仙」以下は除く）であり、以前と以後とで大差はない。平岡武

夫他編『唐代の詩篇』（同朋社、一九八五年）によって与えられた作品番号による。

(31) 皮日休の附詩四首は左の通り。『湖北先正遺書』所収『松陵集』の巻数・葉数によって示す。

「病中有人惠海蟹、轉寄魯望」(卷六、七表)

「早春以橘予寄魯望」(卷六、九裏)

「以紗巾寄魯望、因而有作」(卷六、一七裏)

「醉中寄魯望一壺并一絶」(卷八、一一裏)

(32) 韓偓の附詩三首は左の通り。

「同年前虞部李郎中自長沙赴行在、余以紫石硯贈之、賦詩代書」

(全唐詩882—7815)

「余作探使、以繚綾手帛予寄賀、因而有詩」(882—7825)

「以庭前海棠梨花一枝寄李十九員外」(882—7827)

(33) 〈21〉の詩題に「…以詩酬謝」とあり、「酬謝」はしばしば唱和詩に使用されるが、これによって附詩の存在を断定することはできない。たとえば、『松陵集』卷六に皮日休が魚を贈ってくれたことに対する陸龜蒙の謝詩「襲美以巨魚之半見分因以酬謝」があるが、『松陵集』の体例からみて、これに先立つ皮日休の附詩はよまれていないと考えるのが妥当である。通常、詩題に「酬〜」「和〜」「次韻」等とあれば唱和詩と言えるが、一般にどのような詩題であればこれに先立つ附詩の存在が認められるのか、あるいは認められないのかについては、なお検討を要する。注(6)陳氏著書、第二章参照。

- (34) 白居易の唱和詩は「和張十八祕書謝裴相公寄馬」(1211・1203)。「文苑英華」卷三三〇「禽獸・馬」に張籍の謝詩「蒙裴相公賜馬、謹以詩謝」、裴度の唱和詩「酬張祕書因寄馬贈詩」、及び李絳・韓愈・張賈・元稹・白居易・劉禹錫等の唱和詩が収められる。劉禹錫の詩は後日の追和。白居易と馬については、丸山茂「樂天の馬―唐代文学の文化史的研究―」(『白居易研究年報』第二号、二〇〇一年)、同「妾換馬」考(同第五号、二〇〇四年)に詳し。
- (35) 劉禹錫と元稹の間で文石枕と壁州鞭が贈答されたことについては、丸山茂「白氏交遊録―元稹・劉禹錫―(上)」(『研究紀要』第六五号、日本大学文理学部人文科学研究科、二〇〇三年)二二頁に言及がある。
- (36) 鶴をめぐるやりとりについては、柴格朗「劉禹錫と白居易の鶴を題材とした詩」(『大阪学院大学人文自然論叢』三八―一、大阪学院大学人文自然学会、一九九九年三月)及び同氏著『劉白唱和集(全)』(勉誠出版、二〇〇四年)の関連する詩の注釈と解説に詳しい。また、坂井多穂子「白居易と鶴」(『人間文化研究科年報』第一三三号、奈良女子大学大学院人間文化研究科、一九九八年三月)二八頁、小松英生「白居易と鶴」(『岡村貞雄博士古稀記念中国学論集』同論集刊行会、白帝社、一九九九年八月)三六六頁以下にも考察がある。
- (37) 注(4)高氏論文の注4参照。また、本稿第二節の冒頭に記したように、合山氏は北宋詩分類表においてその他として「乞求」
- を挙げ、これを贈答品に関する詩に含めておられる。なお、唐詩の詩題を見るに、物を乞う詩の詩題には「乞」字以外にも「請」「求」「覓」などが用いられる。
- (38) 『増訂注釈全唐詩』(文化芸術出版社、二〇〇一年)第五冊五五九頁、丁立群氏の注によれば、貫休「上盧少卿覓千文」の「盧少卿」は書を善くした盧知猷、「千文」は『千字文』。また、陶敏『全唐詩人名彙考』(遼海出版社、二〇〇六年)一三六二頁参照。盧少卿の詩は残されていない。
- (39) 課題の一端については、注(2)拙文の終わりに簡単に触れた。

【資料篇】

「表I資料」に白居易の贈物詩の詩題を、「表II資料」に物品贈答の事実を知り得る詩の詩題を、ゴチック体で示す。詩題の後の数字は花房氏及び謝氏による作品番号。行を改めて、作詩年、作詩時の年齢、作詩の地を記す。事柄の説明に当たっては、本文と注における記載との重複を避けることにとめた。本文・注の関係箇所とあわせて参照ねがいたい。

「表I資料」

〈01〉「庾順之以紫霞綺遠贈、以詩答之」(0726・0722)

元和五年、三九歳、長安。庾敬休(字は順之)から「紫霞綺」(紫のあや絹)を贈られたことを謝する七律。尾聯に、この布を縫い合わせて「合歡被」(共寝のふとん)となし、寝ても覚めても君と顔をあわせていることくでありたい、とうたう。庾敬休の

任地については、起句に「千里故人心鄭重」とあって遠方であることは知られるが、不明。朱氏は宣州かという（『白居易交遊考』『白居易研究』六九頁、陝西人民出版社、一九八七年）。二句目に「一端香綺紫氈」とあり、贈られた紫霞綺の分量を「一端」と言う。明治書院『白氏文集(三)』二二三頁はこの句について「一端 二丈、幅二十尺、六メートル余」とする。「一端」は首句の「千里」との対句であり、かならずしも実数とする必要はないが、『資治通鑑』卷二三八、憲宗元和五年の条に「悉罷諸道行營將士共賜布帛二十八萬端匹」とあり、胡三省の注に「唐制、布帛六丈爲端、四丈爲匹」とある。もし、一端が六丈であれば一八メートル余りとなり、かなりの分量となる。

〈02〉聞微之江陵臥病、以大通中散・碧腴垂雲膏寄之、因題四韻(10730・0726)

同前。江陵で病に伏せる元稹に「大通中散・碧腴垂雲膏」を贈ったときの七律。この薬で南方瘴癘の地の病を十分に治すことができなくても、病中の慰めとなって君の喜ぶ顔が目につかぶ、とうたう。元稹に唱和詩「予病瘴、樂天寄通中散・碧腴垂雲膏、仍題四韻、以慰遠懷開拆之間、因有酬答」(『元稹集』卷一七、二〇二頁)がある。「大通中散」について、謝氏『校注』一〇八二頁の注に散薬の一種とし、張九齡「謝賜香藥面脂表」に「臣某言、某至宣敕旨、賜臣裏衣香・面脂及小通中散等藥」(全唐文卷二八八)等とあるのを挙げ、白居易が元稹に贈ったのもまた内廷における下賜品であろうかと言う。「碧腴垂雲膏」については、「蓋

亦道家所製膏散」とする。ちなみに、陸游の詩「予秋夜觀月得瘧疾、枕上賦小詩自戲」に「斷無人寄碧腴膏」とあり、その自注に、「：又元微之謫江陵病瘴、白樂天自長安寄以碧腴膏」とある。

この詩、花房氏、朱氏、謝氏いずれも元和五年の作とする。一方、元稹の唱和詩について、卞孝萱『元稹年譜』(二一五頁、齊魯書社、一九八〇年)は元和八年の作とし、楊軍『元稹集編年箋注』(四四五頁、三秦出版社、二〇〇二年)もこれをうける。周相録『元稹年譜新編』(一二四頁、上海古籍出版社、二〇〇四年)も元和八年の条に「白居易寄藥給元稹」と記し、白居易の原唱も同年の作とする。なお検討を要する。

〈03〉蕭員外寄新蜀茶(10774・0770)

同前。蜀の蕭員外から、摘んだばかりの「新蜀茶」を贈られたことを謝する七絶。新茶であることを喜び、酒に乾いたのどにはありがたい、とうたう。蕭員外については不明だが、羊士諤(七六二?〜八二二?)に「郡中言懷寄西川蕭員外」(全唐詩卷三三三、三七二頁)がある。あるいは同一人物か。

〈04〉以鏡贈別(10466・0463)

元和七、八年、四一〜二歳、下邳。遠方に旅立つ「少年」に餞別として鏡を贈ったときの五言古詩。老いた顔をうつすよりも若者に贈ったほうがまだ、と言う。

〈05〉還李十一馬(10798・0794)

元和九年、四三歳、下邳。李建が馬をくれるというのを辞退したときの七絶。起句に「傳語李君勞寄馬」とある「傳語」はこと

づて。詩を寄せられたわけではない。当時白居易は服喪の身であり、馬に乗っても行くところがないので朝廷に出仕する人にあげてほしい、と言う。馬は贈られなかったであろうが、贈物に関わる作として取り上げる。李建については、丸山茂「白氏交遊録―李建―(上)」(「研究紀要」六一、日本大学文学部人文科学研究所、二〇〇一年)、同「白氏交遊録―李建―(下)」(同六二、同、同)参照。

〈06〉「寄生衣與微之、因題封上」(0817・0843)

元和十年、四四歳、長安。通州の元種に「生衣」(夏のひとえ)を贈ったときの七絶。生衣の軽さ薄さを強調したうえで、それでも通州の暑さには耐えられぬかと心配だ(「莫嫌輕薄但知著、猶恐通州熱殺君」)、と元種を氣遣う。元種に唱和詩「酬樂天寄生衣」(「元種集」卷二一、一三六頁)がある。「生衣」は下賜品ともなっている。

〈07〉「寄蕪州簞與元九、因題六韻(時元九鰥居)」(0939・0933)

元和十一年、四五歳、江州。通州の元種に「蕪州簞」(蕪州産のたかむしろ)を贈ったときの五言排律。蕪州の竹を織って簞を二枚作り、妻を亡くした「獨眠の人」元種に寄せる、と言う。末尾に「通州炎瘴地、此物最關身」と言い、先の「生衣」の場合と同じく、炎熱の地に暮らす元種の身を氣遣う。元種に次韻詩「酬樂天寄蕪州簞」(「元種集」卷一五、一七八頁)がある。蕪州は江州から長江を百キロほどさかのぼった地で、良質な簞の産地。

元種の唱和詩の編年について、花房英樹氏は元和一一〜一三年

とし(同氏『元種研究』所収「作品綜合表」による。彙文堂書店、一九七七年)、楊軍『元種集編年箋注』(七五八頁)は元和一二年とする。周相録『元種年譜新編』(一五三頁)は白居易が元種に簞を贈ったのを元和十年の十月頃とし、元種の詩を元和一三年の追和かとする。

〈08〉「謝李六郎中寄新蜀茶」(0994・0988)

元和十二年、四六歳、江州。忠州の李宣から「新蜀茶」を贈られたのを謝する七律。他人に贈らず、病身の私にまず贈ってくれたのは、茶の味がよく分かる人(「別茶人」)であるためだろう、とうたう。蜀茶については注(25)(26)布目氏論文・著書参照。また、王賽時著『唐代飲食』(齊魯書社、二〇〇三年)第五章「唐代的茶与飲料」参照。

〈09〉「十二年冬、江西温暖、喜元八寄金石凌到、因題此詩」(1041・1035)

同前。長安の元宗簡から「金石凌」(薬)を贈られたことを喜び七言六句。詩の末尾に「欲將何藥防春瘴、只有元家金石凌」とあるのによれば、炎暑による疫病を防ぐ薬と見られる。詩に「今冬臘候不嚴凝、暖霧温風氣上騰」(この冬十二月の寒さは厳しくなく、暖霧、温風に蒸気が立ち上る)とある。この年は異常な暖冬であったようだ。朱氏『箋校』一〇八七頁「金石稜」注に、「元種爲令狐相國謝賜金石凌紅雪狀：『恩賜金石凌・紅雪各一合。右中使某乙至、奉宣進止、以臣將赴山陵、時屬炎暑、賜前件紅雪等。：豈謂天光下濟、靈藥旁沾、：』據此、金石稜・紅雪蓋皆藥散之名」

と元種の文を引く。権徳輿「爲趙相公謝賜金石凌表」(全唐文卷四八五)にも「臣憬言、伏奉恩敕、賜臣金石凌并方及服法、并金花銀合一」とあるように、下賜品となった。なお、元宗簡については注(13)丸山氏論文に詳しい。

〈10〉元九以綠絲布白輕裕見寄、製成衣服、以詩報知(1011・1005)

元和一三年、四七歳、江州。通州の元種が「綠絲布・白輕裕」(緑の布・白紗のうすもの)を贈ってくれたことを謝し、あわせてこれで病妻が自分のために衣服を仕立ててくれたことを報告する七律。注(2)拙文に贈り手である元種の任地を「長安」としたのは「通州」の誤り。訂正する。詩中に「珍重京華手自封」とあるのによれば、「綠絲布・白輕裕」は長安から元種が持参したもの。

元種に附詩はなく、白居易の謝詩に対する唱和詩「酬樂天得種所寄紵絲布白輕庸、製成衣服、以詩報之」(『元種集』卷二一、二三五頁)がある。元種の詩は楊軍『元種集編年箋注』(六五九頁)では元和一一年にかけが、花房英樹『元種研究』に元和一三年とするのが妥当である。周相録『元種年譜新編』(一六七頁)もこの詩の編年について考証し、元和一三年夏とする。

〈11〉初除官、蒙裴常侍贈鶻銜瑞草緋袍・魚袋、因謝惠貺、兼抒離情(1091・1084)

同前。忠州刺史に任ぜられたおり、江西觀察史裴堪から「鶻銜瑞草緋袍・魚袋」(刺史の身分を表す緋色の上着と魚形の符契を入れた袋)を贈られたことを謝し、あわせて別離の思いを述べる七律。

〈12〉贈康叟(1112・1105)

元和一四年、四八歳、忠州。齡八十の老翁康叟に「寒衣」(冬着)を贈ったときの七絶。忠州刺史たる自分が康叟に寒衣を贈ったのは、天竺の遺民に出会うことが希となったため、と言う。

〈13〉寄胡餅與楊萬州(1124・1116)

同前。万州の楊焯厚に都風の「胡餅」(胡麻つきの焼餅)を贈ったときの七絶。承句に「麵脆油香新出爐」(歯ざわりサククリ、油も香ばしく、焼き上げたばかり)と美味を強調する。酒や茶とは違って胡餅は日持ちがしないが、万州は忠州から長江に沿って七、八〇キロ下流に位置し、船を利用して送り届けることが可能であった(16)参照。胡餅については、陳紹軍「胡餅來源探釈」(『農業考古』総第三七期、一九九五年一號)、及び閻艷『唐詩食品詞語語言与文化之研究』(巴蜀書社、二〇〇四年)「胡餅」の項参照。

〈14〉畫木蓮花圖寄元郎中(1127・1119)

同前。長安の元宗簡に「木蓮花圖」を贈ったときの七絶。詩人である君だけがよくこの花を愛してくれるから、絵に画いて贈るので(「唯有詩人應解愛、丹青寫出與君看」)とうたう。忠州西北の鳴玉谿に生長した木蓮を道士の毋丘元志に写させたことが「木蓮樹生巴峽山谷間…」詩(1116・1109)に見える。元宗簡に贈った絵はこのときのものであろう。なお、北宋・韋驥の「忠州木蓮花二絶」(其一)に「喬木開花似水蓮、畫圖遠自昔人傳」とあり、その自注に「唐白傳有畫木蓮花圖」(北京大学古文獻研究所編『全宋詩』卷七三三、八五九九頁、北京大学出版社)とある。「白傳」

は晩年に太子少傅となった白居易のこと。

〈15〉「題郡中荔枝詩十八韻、兼寄萬州楊八使君」(1131・1123)

同前。万州の楊焜厚に「荔枝」を贈ったときの五言排律。荔枝の花・葉・実、形・色・香・味、腐りやすい性質等を細やかに描写する。詩題からは詩を贈ったにすぎないとも読めるが、本文末尾に、荔枝は日持ちがしないので都の天子に貢することはできないが、潘郎に似て男前の君にだけは贈ることができると言うこと、また〈16〉に重ねて荔枝を寄せることよって、確かに荔枝を贈ったことが知られる。荔枝が変質しやすいことについては白居易の「荔枝圖序」(1430)に詳しい。また「荔枝樓對酒」(1172・1164)があり、「荔枝樓」は白居易自身が建てたという(朱氏『箋校』一一〇頁の注参照)。荔枝に対する愛好のほどが知られる。荔枝が当地の特産品であることについては、前掲閻艷『唐詩食品詞語語言与文化之研究』「荔枝」の項参照。

〈16〉「重寄荔枝與楊使君、時間楊使君欲種植、故有落句戲之」(1133

・1125)

同前。楊焜厚が荔枝を植えようとしていると知り、再度荔枝を贈ったときの七律。首聯に、摘み取ってくればまさに朝露を帯びたすがた、このまま船に乗せて君のもとに贈るのだ(「摘來正帶凌晨露、寄去須憑下水船」と輸送手段が記される)。

〈17〉「路上寄銀匙與阿龜」(1316・1309)

長慶二年、五一歳、杭州赴任途中。長安の阿龜(弟白行簡の子亀兒)に「銀匙」(銀の匙)を贈ったときの五律。阿龜はこのと

き十歳。この匙を見て私を思い出し、たくさん食べるよう言い含める。頸聯に、弟よ、阿龜をよくよくかわいがっておくれ、保母の鄒婆もよく面倒をみておくれ(「小子須嬌養、鄒婆爲好看」と言うように、詩と銀の匙は直接には弟の行簡に贈られたと考えられる)。

〈18〉「錢湖州以箬下酒、李蘇州以五酸酒、相次寄到、無因同飲、聊詠懷」(1341・1334)

同前。湖州刺史錢徽が「箬下酒」(箬溪の酒)を、蘇州刺史李諒が「五酸酒」(蘇州の酒)を贈ってくれた。かつてそろって宮中に出仕していた三人がともに飲むことができるのはいつの日か、と感懐を述べる七律。

〈19〉「畫竹歌并引 協律郎蕭悅善畫竹、舉時無倫。蕭亦甚自祕重、

有終歲求其一竿一枝而不得者。知予天與好事、忽寫一十五竿、惠然見投。予厚其意、高其藝、無以答睨、作歌以報之、凡一百八十六字云。」(0594・0591)

長慶二、三年、五一、二歳、杭州。蕭悦は竹の絵に優れていたが、めったに人には贈らない。それなのに、私が絵画については「天與の好事」と知って十五竿の竹画を贈ってくれた。何のお返しもできないので、この歌を作って厚情に報いる、と言う七言古詩。

〈20〉「江樓晚眺、景物鮮奇、吟玩成篇、寄水部張員外」(1378・1371)

長慶三年、五二歳、杭州。江樓で夜の杭州の好風景を眺め、前年に水部員外郎となった長安の張籍に「郡樓登望圖」(樓閣から

眺望される杭州の風景を画いた絵画)を贈ったときの七律。尾聯の「好著丹青圖寫取、題詩寄與水曹郎」(さあ、この風景を絵に画いて、都にいる水部員外郎の張君に贈ってあげよう)という表現に、杭州の絶景を友人と分かちあおうとする白居易の喜びが読み取れる。張籍に謝詩「答白杭州郡樓登望畫圖見寄」(全唐詩卷三八五、四三三七頁)がある。

〈21〉「崔湖州贈紅石琴薦煥如錦文、無以答之、以詩酬謝」(2199・1403)

宝曆元年、五四歳、蘇州。湖州刺史崔玄亮が「紅石琴薦」(紅石でできた琴を載せる台)を贈ってくれたことを謝する五律。「人間無可比、比我與君心」(その音色のすばらしさは比べようもなく、ただ私と君の心にとえられるのみだ)と、琴の音色の気高さを二人の心になぞらえる。四年後の作「池上篇并序」(928・補09)には「博陵崔晦叔與琴、韻甚清」とあり、崔玄亮が白居易に琴を贈ったことが記される。また白居易の「唐故虢州刺史贈禮部尚書崔公墓誌銘并序」(940)に「遺誠諸子。其書大略云：吾玉磬琴、留別樂天、請爲墓誌云爾」とあり、崔玄亮が子どもたちに、白居易に玉磬琴を贈って墓誌の執筆を請うよう遺言したことが記される。朱金城氏はこれらの詩文から、「思うに崔玄亮はしばしば白居易に琴を贈っている」と指摘する(『箋校』三七五二頁)。琴は崔玄亮の愛好するところであったに違いなく、その点で白居易と趣味が一致したのであろう。琴を介した晩年の交流については、朱氏の「白居易交遊考」(『白居易研究』四二頁)参照。

〈22〉「送鶴與裴相臨別贈詩」(2626・1826)

大和二年、五七歳、長安。裴度に鶴を贈るにあたり、その鶴に寄せる七律。この詩、直接には鶴に与える作であるが、首聯に、裴宰相殿がおまえを愛することはおまえにも分かるだろう、信じられぬなら、裴公がおまえを所望した詩を吟じて聞かせてやろう(「司空愛爾爾須知、不信聽吟送鶴詩」、「送」は一に「乞」に作る)と裴度の來詩に言及し、また劉禹錫に唱和詩「和樂天送鶴上裴相公別鶴之作」(『箋証』外集卷一、一〇七〇頁)が残されている)ことから、裴度にも贈られたに違いない。この詩の前後に、裴度・白居易・劉禹錫の間で鶴のやりとりを巡って何首もの詩が酬唱されていることについては、本文第四節に記した。

〈23〉「寄兩銀榼與裴侍郎、因題兩絕句」(2780・2781・1973・1974)

大和五年、六〇歳、洛陽。襄州の裴度に「銀榼」(銀の酒壺)を贈ったときの七絶。わが心と緑酒を共に飲みほしてほしい(「丹心綠酒一時傾」)、とうたう。朱氏『箋校』一九〇七頁に、詩題の「裴侍郎」は「裴侍中」の誤りとする。なお、白居易の詩にしばしば登場する「榼」の形状については、漢代の資料ではあるが、孫機著『漢代物質文化資料図説(贈訂本)』(上海古籍出版社、二〇〇八年)三七一頁に紹介がある。

〈24〉「劉蘇州以華亭一鶴遠寄、以詩謝之」(3108・2254)

大和七年、六二歳、洛陽。蘇州の劉禹錫が華亭の鶴をはるばる贈ってくれたことを謝する五律。〈22〉に白居易が鶴を手ばなしたことがうたわれるが、その寂寞を慰めるべく劉禹錫から贈られた

もの。なお、華亭の鶴は白居易がかつて杭州刺史をやめて洛陽に帰ったときに持ち帰ったことがある。

〈25〉「晩春閑居、楊工部寄詩、楊常州寄茶同到、因以長句答之」〔312 8・2274〕

大和八年、六三歳、洛陽。長安の楊(工部)汝士が詩を、常州の楊虞卿が茶を贈ってくれたことを謝する七律。常州は茶の産地として知られる。楊汝士もまた茶を贈ってくれたことについては〈29〉に見える。

〈26〉「劉蘇州寄釀酒糯米、李浙東寄楊柳枝舞衫、偶因嘗酒試衫、輒成長句寄謝之」〔3223・2369〕

同前。蘇州の劉禹錫が「糯米」(もち米)を、越州の李紳が「舞衫」(舞の衣装)を贈ってくれたことを謝する七律。尾聯に、友人が自分の寂寞を思つて遠くから「飲(よろこび)」を贈つてくれた(「慚愧故人憐寂寞、三千里外寄歡來」、とうたう。劉禹錫に唱和詩「酬樂天衫酒見寄」(『箋証』外集卷四、一二一九頁)がある。

〈27〉「偶於維陽牛相公處覓得箏、箏未到、先寄詩來、走筆戲答(來詩云「但愁封寄去、魔物或驚禪」)」〔3286・2432〕

開成元年、六五歳、洛陽。揚州の牛僧孺に「箏」(こと)を求めたところ、箏が着く前に詩が届けられたので、それに答えた五律。実際に箏が届けられたことは、〈45〉によって確かめられる。「來詩云」以下は白居易の自注。引用される牛僧孺の詩二句は逸詩で、もしこの箏を贈つたならば、その妙なる魔性の音色が君の禪の修

業の妨げにならないかと心配ですよ、という戯れの表現。資料篇〈45〉参照。

〈28〉「酬裴令公贈馬相戲(裴詩云「君若有心求逸足、我還留意在名姝」蓋引妾換馬戲、意亦有所屬也)」〔3346・2492〕

開成三年、六七歳、洛陽。裴度が馬とともに戯れの詩を贈ってくれたのに答える七絶。自注「裴詩云」以下に引かれる裴度の兩句(逸詩)は、君(白居易)は私のところの駿馬がほしそうだし、私は君のところの美女がお目当てだ、の意。馬と美女のやり取りの申し出に、白居易は「不辭便送東山去、臨老何人與唱歌」(美女を送るのはやぶさかではないけれど、それでは老いの楽しみみの歌の相手がいなくなります)と答えている。劉禹錫に唱和詩「裴令公見示酬樂天寄奴買馬絶句、斐然仰和、且戲樂天」(『箋証』外集卷四、一二六四頁)がある。詳しくは、注(34)丸山氏論文、及び注(36)柴氏『劉白唱和集(全)』七二四・五頁参照。

〈29〉「謝楊東川寄衣服」〔3374・2520〕

同前。劍南東川節度使楊汝士から、秋の「衣服」が贈られたことを謝する七絶。年老いて年々友達も少なくなるが、君だけは私のことを忘れることなく、「春茶」(春摘みの茶葉)がまだなくならないうちに「秋衣」を送ってくれた(「唯有菓兄不相忘、春茶未斷寄秋衣」とあり、この年の春には茶も贈られていたことがわかる。なお、楊汝士は白居易の妻の兄で、字は慕菓。詩にいう「菓兄」。

〈30〉「公垂尚書以白馬見寄、光潔穩善、以詩謝之」〔3399・2545〕

開成四年、六八歳、洛陽。汴州の李紳から、毛並みがよくて温順な「白馬」を贈られたことを謝する七律。

〈31〉「病中辱崔宣城長句見寄、兼有綉綺之贈、因以四韻總而酬之」(3447・2593)

開成五年、六九歳、洛陽。病にあるとき、宣州の崔龜從から「長句」とともに「銀觥・霞綺」(銀杯・あや絹)を贈られたことを謝する七律。自注に「昔予考制策、崔君登科也」とあるように、崔龜從は長慶元年、白居易が考官であったときに及第した。それゆえ尾聯に、当時及第した者はいまや宮中に満ちているが、君のごとく変わらぬ心でいてくれる者は希だ(「科第門生滿霄漢、歳寒少得似君心」と称える。

〈32〉「繼之尚書自余病來寄遺非一、又蒙覽醉吟先生傳、題詩以美之、今以此篇用伸酬謝」(3465・2611)

同前。「繼之尚書」は楊嗣復。病中、長安の楊嗣復から「茶藥・衣裳」を贈られたこと、及び「醉吟先生傳」を読み詩を題してくれたことを謝する七律。領聯に「茶藥贈多因病久、衣裳寄早及寒初」(茶や藥をたびたび贈ってくれたのは長く病気がちなため、衣服も冬の寒さが来る前に贈ってくれた)とあり、その自注に「寄贈せられし所の物は皆時に及べり」とある。詩題に「寄遺すること一に非ず」とも言うように、一度ならず、茶、藥、衣服などの必要な物を必要な時に贈ってくれたのである。なお、楊嗣復は楊汝士・楊虞卿らと祖先を同じくする楊氏一族のうち同世代の一人。

〈33〉「南侍御以石相贈、助成水聲、因以絶句謝之」(3554・2700)

会昌元年、七〇歳、洛陽。南卓が「兩片青苔石」(二つの青苔の生えた石)を贈ってくれたことを謝する七絶。石に水を流せばまるで琴の音のようで、「塵心を洗う」と言う。石に関しては別に楊汝士所有のものを借りて洛陽の宅に置いたことをうたう作「楊六尚書留太湖石在洛下、借置庭中、因對舉杯、寄贈絶句」(3570・2716)がある。

#### 〔表Ⅱ資料〕

〈34〉「獨酌憶微之(時對所贈盞)」(0733・0729)

元和五年、三九歳、長安。かつて元稹から贈られた銀の「盞」(さかずき)を手に独酌し、左遷されて江陵にある元稹を思う七絶。詩題の自注に「時に贈られし所の盞に對す」と言う。

〈35〉「感鏡」(0475・0472)

元和七、八年、四一、二歳、下邳。昔、「美人」が別れに贈ってくれた鏡に感じて作った五言古詩。謝氏『校注』八〇三頁に、「美人」は一般的な言い方ではなく、若い頃の恋愛と関わりがあるであろうという。田口暢穂氏に「白居易「感鏡」詩をめぐる」(「中国文学研究」第八期、早稲田大学中国文学会、一九八二年)がある。女性との別れに、女性の側から記念の品を贈られるのは、〈38〉「感情」に似る。

〈36〉「寄元九」(0465・0462)

元和九年、四三歳、下邳。服喪中、左遷の地江陵にある元稹から寄せられた交誼に感謝する五言古詩。病身の私を手紙で励まし

てくれるのみならず、元種自身が左遷の身でありながら、わずかな俸給の中から三度も「衣食資」(衣服・食品などの物資)を「二十萬」も贈ってくれた(「三寄衣食資、數盈二十萬」とうたう)。

「二十萬」は、左拾遺・翰林学士の任にあったときの詩「酔後走筆、酬劉五主簿長句之贈、兼簡張大賈・二十四先輩昆季」(0584・0581)に「歳愧俸錢三十萬」とあるのに照らせば、相当の額である。「三たび寄す」は服喪の三年の間毎年贈られたことを言うとも、しばしば贈ってくれたことを言うとも解釈できるが、いずれにしてもその好意が継続して多くの贈物となったことを意味する。また、「念我口中食、分君身上暖」(君は私の食を気かけ、身に着ける衣服の暖かさを分けてくれた)とうたうのは、贈物を共有することで友情の深さを強調するもの。

〈37〉渭村退居、寄禮部崔侍郎・翰林錢舍人詩一百韻(0807・0803)

同前。渭村(下邳)に退居して三年目、宮中勤務の崔群・錢徽に寄せた五言一百韻。まず退居生活の困窮を述べ、ついにかつて共に宮中で職務に励み交誼を結んだことを回想し、最後に崔群・錢徽から「帛・糧・藥・書」(きぬ織物・食物・薬・手紙)を贈られたことを謝して現在の心境を披瀝する。詩の始めに衣食に困窮している現状を述べるのは、後半で崔群・錢徽から贈物を得たことへの感謝を記すのと呼応しており、この詩もまた友人間の贈答が創作の主要な契機となっている。錢徽については、丸山茂「白氏交遊録―錢徽―(上)」(「研究紀要」五八、日本大学文理学部人文科学研究所、一九九九年)、同「白氏交遊録―錢徽―(下)」

(同五九、二〇〇〇年)参照。崔群については、同氏「白居易をめぐる人々」(『白居易研究講座』第二卷「白居易の文学と人生Ⅱ」太田次男他編、勉誠社、一九九三年)八八頁以下、西村富美子「白居易の交友関係について―李建・崔群・崔玄亮―」(『白居易研究年報』第三号、二〇〇二年)参照。

〈38〉感情(0511・0508)

元和一二年、四六歳、江州。左遷の地江州で虫干しのさい、昔、「東鄰の婢娟子」(東隣りに住む美人)から贈られた「履」(くつ)を久しぶりに取り出して感慨にふける五言古詩。女が「履」を贈ってくれたとき、「特用結終始。永願如履屐、雙行復雙止」(この履のように、行くも一緒、止まるも一緒でいたいのです)と語ったという。このように、贈られた物と言葉とがセットでうたわれる例に「長恨歌(0596・0593)がある。「長恨歌」では、楊貴妃が玄宗に「鈿合金釵」を贈られるとともに、「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」と誓いの言葉を交わす。

〈39〉和萬州楊使君四絶句」其三「嘉慶李」(1136・1128)

元和一四年、四八歳、忠州。万州の楊帰厚から寄せられた詩今逸)に和した絶句四首の第三首。「嘉慶李」は洛陽の嘉慶坊に植わっていた「李」(スモモ)。実が甘かったという。詩に「東都綠李萬州栽、君手封題我手開」とあり、楊帰厚が洛陽の李を万州に持参して植え、その実を手ずから封して忠州の白居易に贈ったことが知られる。(15)(16)参照。「手封」という語は(10)にも見えていた。贈り手の心遣いに深く感謝する表現である。

〈40〉「感舊紗帽（帽即故李侍郎所贈）」(0345・0342)

長慶二年、五一歳、杭州赴任途中。「李侍郎」は李建。杭州への道中、旧友李建の墓がある岐山で、昔贈られた「烏紗帽」（黒いうす絹の帽子）に感じて詠じた五律。「烏紗帽」は日常に用いる帽子。友人から紗帽を贈られたことを謝する詩に、李白「答友人贈烏紗帽」（全唐詩卷一七八、一八一―三頁）、張籍「答元八遺紗帽」（卷三八六、四三五―九）がある。「烏紗帽」の贈答は親しい間柄であることを表すであろう。なお、張籍の詩の「元八」は白居易とも交遊のあった元宗簡とされる（李建崑校注『張籍詩集校注』三九七頁参照、国立編訳館主編、華泰文化事業公司、二〇〇一年）。

〈41〉「醉後狂言、酬贈蕭殷二協律」(0606・0602)

長慶二年、五一歳、杭州。酔って大言し、蕭悦・殷堯藩に唱和した七言古詩。二人が貧乏なのを見かねて、「吳綿」（呉産の綿）と「桂布」（桂州産の布）で仕立てた「裘」（わたいれ）を贈ったところ、二人から「詩書」が投ぜられたとあるから、謝詩が寄せられたのである。それに対して、このような「小惠」は論ずるに足らず、自分には「法度・仁」という万人への大きな贈り物があるとうたう。なお、ここに言う「裘」はかわごころではなく、「布裘」と称される布製のわたいれの類。白居易の「新製布裘」(0055・0056)に「桂布白似雪、吳綿軟於雲。布重綿且厚、爲裘有餘溫」（桂の布は雪より白く、呉の綿は雲より柔らかい。布は重く綿は厚く、これで裘を作ったので暖かい）とある。「裘」については、

下定雅弘「白詩の衣服表現に見る「兼濟」と「独善」―裘・衣食」の衣・葛衣など」（『白居易研究年報』第七号、二〇〇六年）に詳しく論じられるのを参照。「桂布」が嶺南桂州産の布であることについては、朱氏『箋校』六六頁参照。

〈42〉「湖上招客、送春汎舟」(1402・1395)

長慶四年、五三歳、杭州。西湖に船を浮かべて送春の宴をもよおしたときの七律。その頷聯に「兩瓶簪下新求得、一曲霓裳初教成」（宴のために二瓶の簪下酒（資料篇（18）参照）を新たに手に入れ、妓女たちには霓裳羽衣曲を教え込んだばかり）とあり、自注に「時崔湖州寄新簪下酒來、樂妓按霓裳羽衣曲初畢」とある。おりよく湖州刺史崔玄亮が「簪下酒」を贈ってくれたのである。同年の作に「早飲湖州酒寄崔使君」(2338・1541)があり、末尾に「瓶裏有時盡、江邊無處沽。不知崔太守、更有寄來無」（酒壺に酒が無くなっても、このあたりでは買うことができない。崔太守よ、もう一度酒を送ってはくれまいか）と隔てのない口調でうたう。詩題に、朝から湖州の酒を飲んで崔使君すなわち崔玄亮に寄すとあるように、〈42〉に崔湖州が簪下酒を贈ってくれたとあるそのことを踏まえての作である。ちなみに、「湖上招客」詩に「欲送殘春」とあって季節は春の終わりであることを言い、「早飲湖州酒」詩ではその直前に置かれる詩「柳絮」に「三月盡時頭白日」とあってやはり春の終わりの作であることがわかる。したがって、「早飲湖州酒」詩は「湖上招客」詩とそれほど間を置かずに作られたと考えられ、再度の酒の送付を請う表現がびったりする。

〈43〉**「磐石銘并序** 大和九年夏、有山客贈余磐石、轉寘於履道里第。時属炎暑、坐臥其上、愛而銘之云爾。」(2947)

大和九年、六四歳、洛陽。「山客」から「磐石」(平らな石)を贈られたことを記す銘。炎暑のころ、この石に座れば心地よく、気に入って銘をあらわした、とうたう。銘に「圓平膩滑、廣袤六尺」とあるから、人が横になるに十分な広さである。この銘は石を贈ってくれた人に寄せる作ではないが、冒頭に「客従山來、遺我磐石」とあるように、贈物の事実を知り得るので取り上げた。

〈44〉**「偶吟」**(3217・2363)

同前。越し方を振り返り、感慨をうたう七律。頸聯に「韋荆南去留春服、王侍中來乞酒錢」(韋荆南は旅立つときに春服を残してくれ、王侍中はやってきて酒代をもらいたいと言ふ)とある。朱氏『箋校』二二二頁によれば、「韋荆南」は荆南節度使韋長。「春服を留む」という表現、これから暖かい南方に赴任する身に春服は不要なので記念に君に置いていくという意であるとすれば、春服は韋長が日ごろ用いていたものを餞別に贈ってくれたのであろう。物を乞う表現である「王侍中來乞酒錢」と対をなしている。

〈45〉**「秦洲淮南牛相公思黯見寄二十四韻(每對雙關、分叙兩意)」**(3289・2135)

開成元年、六五歳、洛陽。淮南の牛僧孺が寄こした二十四韻の詩に唱和する五言排律。牛僧孺と自分の境遇を対比してうたい、終わりに、「遠訊驚魔物、深情寄酒錢。霜紈一百疋、玉柱十三絃。(思黯遠寄箏來、先寄詩云「但愁封寄去、魔物或驚禪。」仍與酒資

同至。)楚醴來樽裏、秦聲送耳邊」と、「酒錢」(酒代)、「霜紈」(しろ絹)、「箏」(こと)、「楚醴」(揚州の酒)などを贈られたことを謝す。括弧内の自注に見える牛僧孺の来詩は〈27〉にも引用される。